
魔法少女リリカルなのは ~高町ヴィヴィオの憂鬱~

sufia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～高町ヴィヴィオの憂鬱～

【Nコード】

N3646S

【作者名】

s u f f i a

【あらすじ】

ミッドチルダ全土を巻き込んだ『JS事件』から3年・・・
9歳になった高町ヴィヴィオは、兄と慕っていたとある青年に恋をする

初めての恋に戸惑う彼女をからかい半分で応援する人たちと、真剣に応援する人たち

そして、1人の青年が彼女の為に奔走する

この小説は、ラモン先生の「とある新人の日常」の後日談的風景を
S u f i a テイストでお送りする三次小説になります

「信念の刃」とも若干コラボしています

感想、意見等を募集いたしますので、お願いいたします

プロローグ(前書き)

遂に、始動です・・・

今回はプロローグになります

プロローグ

新暦0078年 某日

第一管理世界『ミッドチルダ』、首都『クラナガン』にあるとある喫茶店

ここのオープンテラスで一人の青年と二人の少女がコーヒーを飲んでいた

「で、話ってなんだ？ 二人とも」

コーヒーを飲みながら本日呼ばれた要件を聞く

天童綾人 20歳 陸士225隊所属の陸曹長である

「あゝ・・・実はですね・・・」

「ハヤトのことで・・・少し・・・」

対して、綾人を呼び出した張本人達

一人は、スバル・ナカジマ 18歳 湾岸警備隊防災課・特別救助隊 防災士長

そしてもう一人は、ティアナ・ランスター 19歳 本局期待の新人執務官

二人は自分達の同期であり、共に初恋の相手でもある青年、ハヤト・ロックウエルのこととで休暇中の綾人を呼び出した

二人は綾人と同じ訓練校の出身であり、彼は先輩に当る

綾人は訓練校時代から、件のハヤト含み三人の面倒を見ていて信頼も厚く、よく相談に乗っていた

三人が機動六課に配属されてからしばらくは音沙汰が無かったが、「JS事件」の後に交流を再開した

「ハヤトがどうかしたのか？」

「ん〜．．．ちょっと．．．」

綾人の質問に少し考えながら答えるスバル

「その、ハヤトのことを好きって言ってる女の子が居るんですけど．．．」

「お前たちのことか？」

ティアナの説明に即座にそう聞きかえす綾人

「ちち、違います!!」

「なんだ、それじゃあ違う子が．．．あいつもやるね〜」

慌てて否定するスバルを見て、若干残念そうな綾人

「で？　どんな子なんだ？」

興味津々で二人に聞く

しかし、二人はなかなか言おうとしない

「？　おい、スバル？　ティアナ？」

「．．．．．．．．．．9歳の女の子です．．．」

「．．．．．．．．．．は？」

小さく言ったティアナの言葉に耳を疑う綾人

「悪い・・・もう一言言ってくれるか？・・・何歳だつて？」

「9歳の、女の子です・・・」

「・・・・・・・・プツ！！」

それを聞いた綾人は思わず嘖き出す

「あつはははは！！ さすがハヤトだ！！ 小さい子に大人気だな
!?!」

喫茶店だということも忘れて大笑いの綾人

その後、店員にこっ酷く叱られて二人ともども店を追い出された

「つまり、その女の子・・・『ヴィヴィオちゃん』がハヤトのことを本気で好きなんだけど、ハヤトはそれにまったく気付いていない・
・・と・・・・・・・・」
「「はい・・・・・・・・」」

場所を公園に移して話を続ける三人

綾人は散々大笑いした後、ティアナに思いつ切り殴られて正気に戻
つて事情を聞いた

綾人の頭には大きな瘤が出来ている

二人は綾人にヴィヴィオのことを簡単に説明した

『高町ヴィヴィオ』

機動六課で保護し、自分達や隊長達が面倒を見ていた女の子

後の『JS事件』を経て、機動六課スターズ分隊長『エース・オ
ブ・エース』の『高町なのは』に引き取られた

その後、ヴィヴィオはハヤトへの気持ちに気付き、二人にも相談に

来たこともあり、そのたびに思い直すように言っているのだが、ヴィヴィオの気持ちは本物だと知り、応援することを決めた
しかし、ハヤトはとんでもなく鈍感で、ヴィヴィオのことも妹として接しているため、アプローチも子供の言っている事と相手にしていないのだという

「ふむ・・・で、お前たちはいいのか？」

「「え？」」

綾人の質問に首を傾げる二人

「お前等はハヤトのこと、諦めんの？」

「「・・・・・・・・・・」」

俯いて考える

綾人はスバルとティアナの気持ちも知っているため、二人の本心を知っておきたいのだ

「ハヤトのことは好きですけど・・・最終的には、あいつに決めてもらいたいんです」

「うん・・・」

「そうか・・・」

二人の決意を汲み取った綾人

「わかった。俺で出来ることがあるなら協力する」

「本当ですか!？」

綾人の言葉に目を輝かせるスバル

「もともとそのつもりなんだろう？」

「えへへ……」

「すいません……」

苦笑いするスバルに頭を下げるティアナ

「とりあえず、ハヤトと話をしてみるか……」

「ハヤトなら、多分執務官の規定訓練でスポーツジムに行ってると思います」

「サンキュー。それじゃ、行ってみますか……それじゃな？」

「はい！」

手を振りながら立ち去る綾人を見送る二人

プロローグ（後書き）

どうも！！

さあ、遂に始まりました新作！！

今回はハヤト君もヴィヴィオも名前だけの出演です

綾人君の性格は「信念」とは若干変わっていますが、根っこの部分は同じつもりです

まあ、「後輩をからかうのが大好きな困った先輩」という設定にはなっていますが・・・

では次回予告

スポーツジムで規定訓練を終えたハヤト・ロックウエル
疲労した彼に、困った先輩の魔の手が伸びる・・・

「元気そうだな？ ハヤト」

「げ！！ 天童先輩！？」

次回、「とある後輩との再会」

今回は、ハヤト君とのお話になります！

感想なんかもお待ちしてま〜す！！

第1話 とある後輩との再会（前書き）

長らくお待たせしました！！

やっと1話の投稿です！！

第1話 とある後輩との再会

ミッドチルダのとある場所に建設されている大型のスポーツジム
その中にあるアリーナの片隅でへたり込んでいる一人の青年がいた

「ふい〜・・・きつ〜!!」

彼の名は『ハヤト・ロックウエル』 19歳の新人執務官

彼は今、執務官の規定訓練である三時間の格闘訓練が終了し、ジムの片隅で大量の汗を流しながら休んでいた

「帰ったら書類仕事か〜・・・メンドイ」

「元氣そうだな、ハヤト」

「はい?・・・げ!! 天童先輩!？」

不意に聞こえた声に振り向くと、先輩で兄貴分の綾人が立っており、
ハヤトは驚きの声を挙げる

「“げ”とはなんだ“げ”とは・・・。おーおー、一丁前に疲れた
みたいな顔してんか?」

“みたいな”じゃなくて本当に疲れてるんすけど・・・」

明るい綾人に若干の温度差のあるハヤト

「で。どうしたんすか? こんな所で」

「ティアナに聞いたんだよ」

「ティアナ?」

不意に出た友人の名前に首を傾げるハヤト

「ああ、お前がこのジムで執務官の規定訓練やってるってな」

「あいつは・・・まあ、もう終わりましたけど・・・」

「そうみたいだな」

「帰ったら書類の山っすよ・・・もう、面倒くさくて」

げんなりした表情で言うハヤト

「それでも、ちゃんとこなすお前も、根は真面目だと思っけどな」

「そうっすか？そんじゃ、俺シャワー浴びてきますんで・・・」

立ち去ろうとするハヤト

しかし、綾人がしつかりと肩を掴んだ

「まあ、待て」

「なんスか？・・・てか、肩が痛いっス・・・」

「これから時間あるか？」

「いや、書類仕事があるって言いませんでした？」

「少し付き合え」

「いや、だから・・・」

「付・き・合・え」

「・・・はい」

有無を言わせない少々強引な綾人

ハヤトも完全に諦め、ずるずるとコートの中に引きずられていく

「どうしてこうなった・・・？」

「久しぶりだし、別に良いだろ？」

「良くねえっスー!!」

コートの中で、対面する二人
上着を脱いで、肩を回して軽く準備運動する綾人と手を付いて崩れ
落ちているハヤト

「前の部隊でどれだけ成長したのか、肌で感じたいしな」
「それ、何気に危ない発言っス」

訓練校時代、綾人は暇を見つけてはハヤトに近接戦闘の訓練をして
やっていた（ハヤト本人は逃げ回るか軽くサンドバツク状態だった
のだが）

「そんな事は良いから、構えな？」

左手を前に出し、右手を腰に据えて握る綾人

「いや・・・あの、先輩？」

「か・ま・え・な？」

「はい・・・」

につこりと笑って催促する先輩に、諦めて構えるハヤト

「はぁ・・・久しぶりに、三途の川のあの子に会いに逝くのか・・・」

「なに言ってるんだ、行くぞ!!」

ブツブツと呟くハヤトを放置して、無常にも試合が開始される

五分後・・・

「もう・・・無理・・・」

「だらしねえな〜・・・まったく」

コートの真ん中で寝そべって息の上がつているハヤトとまだまだ体力の余っている綾人

「先輩に格闘戦で勝てるわけねえよ!!」

「手加減はしたぞ?」

「あんなの、手加減になつてねえっス!!」

クロスレンジでの一対一は綾人の最も特意とする戦いであり、疲労したハヤトが綾人に勝てる確率は万に一つ、いや、兆に一つしかない

尤も、射撃を用いても綾人に勝てることなどほとんど無いのだが

「でもま、訓練校時代からは成長してるよ・・・人並みには」

「先輩に比べりゃ、これが普通っスよ・・・」

「まあ、俺はいつも『規格外』の訓練受けてるしな」

「確かに・・・」

綾人の言葉にある男の顔を思い浮かべるハヤト

綾人の言う『規格外』とは、彼の父親で『剣王』の異名を持つ管理局最強の男『マーク・グリード』のことである

ハヤトも一度だけ彼に会っており、その規格外っぷりに度肝を抜かれている

「なんなら、お前もウチの部隊で訓練受けてみるか?」

「全力でお断りします」

綾人の誘いを即座に断るハヤト

「それは残念だ。さて、何か飲むか？ 一杯ぐらいなら奢るけど」

「あ、そんじゃあコーヒーで・・・」

「あいよ」

そう言つて、外にある自販機に向かう綾人
しばらくして、二本の缶をもって戻ってきた

「ほれ」

「あ、どうもっス」

コートの脇に移動して、同時に缶を開ける二人
そして、綾人はそのまま話題を変える

「聞いたぞ？ 最近はご活躍だそうじゃないか？」

「そのおかげで、休みもまともに取れねーんですよ・・・ゲームも
出来ねーし・・・出会いもねーし・・・そのくせ事件ばっか持つて
こられるし・・・」

「確か・・・『事件と結婚した男』・・・だっけ？」

「止めて！！ それだけは言わないで！！」

耳を押さえて頭を大きく振るハヤト

中途半端に優秀なせいで年がら年中事件を押し付けられていて、い
つの間にか周りがそう言い出した

本人からすれば不名誉以外の何者でもないようで、若干トラウマに
なりかけている

「それだけ周りがお前に期待してるってことだよ。いい事じゃないか？」

「そんな期待はごめんです！！ あゝ・・・出会いが欲しいなゝ！！」

綾人の言葉を真つ向否定しながら、天井を仰ぐハヤト

「出会いなら、仕事してりゃいっぱいあるだろ？ 俺と違って・・・」

綾人のいる225隊は大半が男
いる女性も食堂などの少々年上のマダムくらいしかいない

「それに、案外お前のことを好きって言う娘がいるかもしれないぞ？」

「そんなの、たくさんいますよ・・・小さい子供とか・・・」

何気なく振ってみた綾人の言葉に、落ち込みながら答えるハヤト

「相変わらず、子供に人気だよな？ お前って・・・」

「嬉しくねゝっスよ！！ 出来るなら、綺麗なおねーさんに好かれたいっス！！」

若干涙目になって綾人に力説するハヤト

（なるほどね・・・子供から言われすぎて、ヴィヴィオちゃんのもそう言う風に聞いているわけだ・・・）

ティアナ達から聞いた情報と、ハヤトの態度からそう推理する綾人

ハヤトはヴィヴィオを『妹』として見ているため、彼女の「好き」という感情を他の子供達からと同様に「親愛」として聞いていたため「恋愛」としての「好き」に置き換えられないと考えている

(これはストレートに言っても「あゝはいはい」みたいなノリで軽く流すんだろうな。・・・さて、どうする。・・・?)

「あの・・・先輩？」

難しい顔で考えに浸る綾人を不思議に思い声をかけて見るが、反応が無かった

「・・・返事が無い、ただの屍の「生きてるよ」・・・最後まで言わせてくださいよ」

ハヤトのポケを一言でばつさりの綾人

「どうしたんスか？ 急に黙り込んで」

「いや、まあ・・・ちよつとな・・・さて、俺は帰るわ」

そう言つて、立ち上がる綾人

「は？」

「お前もまだ仕事があるんだろ？ 邪魔すんのもなんだしな」

「もう十分邪魔してるっス・・・」

「何か言つたか？」

小声で突っ込むハヤトに振り向くと大きく首を振っていた

「それじゃな、がんばれよ？」

「ウイッス!!」

立ち去る綾人に間延びした声で送るハヤト

「なんだったんだ？・・・ま、いつか。シャワー浴びてこ・・・」

綾人の行動を不思議に思いながら、フラフラとシャワー室に向かうハヤト

【綾人SIDE】

「ふむ・・・ありゃ、難敵だな。どう攻めるか・・・」

唸りながらジムを出てくる綾人

「うう〜！！ 時間掛かつちやったく〜！！」

「ん？」

綾人の横を慌てた様子で一人の金髪の女の子が走っていくその子は、背負っていたカバンから何かを落としていった

「あ、落としたよ・・・つて、早！？」

綾人が声をかけようとする前に走り去ってしまった少女
あまりのスピードに綾人も驚く

「まったく・・・元気な子だな。さて、何か手掛かりは・・・」

苦笑いしながら彼女の落としていった物を拾い、持ち主の特定を図る綾人

「これは・・・ザンクト・St・ヒルデ魔法学院の生徒証だな・・・名前は・・・
っ!?!?」

生徒証を開き、名前を確認した綾人の顔が驚きが変わる

「高町・・・ヴィヴィオ・・・」

第1話 とある後輩との再会（後書き）

どうも！！

遂に第1話を投稿できました！！

綾人君とハヤト君の掛け合い、結構書いて楽しいです！！

ハヤト君の口調ってこんなのだっけ……？

おかしければ指摘下さい……

では次回予告！！

自宅にて、学校の準備をしていたヴィヴィオは、自分の生徒証が無いことに気づき、二人の母に相談するが……

「ヴィヴィオちゃんは、ハヤトの何処が好きなんだ？」

「えっと……」

次回、「とある少女との出会い」

今回は、綾人君とヴィヴィオが出会います

第2話 とある少女との出会い（前書き）

さて、今回は綾人君とヴィヴィオが出会います

第2話 とある少女との出会い

ミッドチルダ、高級住宅街

この一角にある一軒の家にて・・・

「ヴィヴィオ〜！ 晩御飯だよ〜!!」

「は〜い!!」

家のある一室で、学校の準備をしている少女『高町ヴィヴィオ』

リビングから、時空管理局・戦技教導隊所属で、ヴィヴィオの母親『高町なのは』が呼ぶ

「え〜つと・・・教科書とノートはオツケー!! あとは・・・」

カバンの中を確認し、忘れ物はないかをチェックするヴィヴィオ
そして、カバンの横の小さいポケットを確認するが

「あれ?・・・な、無い!? 生徒証が無い!!」

そこに入れていたはずの生徒証が無いことにようやく気付いたヴィ
ヴィオは、カバンの中をぶちまけた

「無い!! 無いよ〜!!」

涙目になりながら探すが、一向に見つからない

「ヴィヴィオ〜? なにやってるの?」

なかなか降りてこないヴィヴィオに痺れを切らして部屋に入ってくるヴィヴィオの後見人であり、もう一人の“ママ”本局執務官で“金の閃光”と呼ばれる『フェイト・テストロツサ・ハラウン』

「フェイトママ〜！！ 生徒証が無いの〜！！」

フェイトに泣き付くヴィヴィオ

「え？・・・よく探した？」

「うん・・・カバンの中も、今日着てた服も見ただけど・・・見つからないの・・・」

シユンとした表情で報告するヴィヴィオ

「どこかに落としたのかな？ 今日は何処に行ってたの？」

「えっと・・・図書館と・・・いつものジムだけ・・・」

「じゃあ、そのどちらかで落としたのかもね？」

あごに手を当てて考え込むフェイト

「そっか・・・それは大変だね・・・」

「うん・・・」

フェイトの話の聞き、唸るのは

「ちょっと、探してみようか？ アレにはヴィヴィオの大事な物も入ってるしね？」

「うん！ そうだね」

「うう・・・」

母親二人の言葉に顔を赤くするヴィヴィオ

「それじゃ、行く?」

「うん!」

そう言つて準備を始めようとしたとき
家のベルがなる

「? 誰だろ、こんな時間に・・・はい、高町です」

『あ、夜分遅くにすいません。こちらに、高町ヴィヴィオさんはいらっしゃいますか?』

「え? あ、はい。居ますけど・・・」

『実は・・・』

「本当に、ありがとうございます!」

「いやいや、直ぐに届けられて良かったよ」

ヴィヴィオは自分の生徒証を届けてくれた青年、綾人に思い切り頭を下げる

「わざわざ届けてくれてありがとうございます。どうぞ、コーヒーでいいかな?」

「あ、ありがとうございます。高町一尉」

お礼を言いながらコーヒーを差し出すのはに頭を下げる綾人

「よかったね? ヴィヴィオ」

「うん!」

「よっぽど大事なものなんですネ・・・その生徒証」

フエイトの言葉に笑顔で頷くヴィヴィオを見ながら、なのはにそう質問する綾人

「そうだね・・・ヴィヴィオの宝物も入ってるからね」

「宝物？・・・ああ、もしかして」

宝物と聞いて、何かを思い出した綾人

「ヴィヴィオちゃん？」

「あ、はい。なんですか？」

「実は、謝んなきゃいけないことが一つあったんだ」

「え？」

突然そう言われて首を傾げるヴィヴィオ

「いや、その・・・生徒証を届けようとかこの家の住所を知るために、その生徒証を開いたんだよ・・・」

「!!!」

「それで・・・その・・・」

いい難そうに説明する綾人に、驚いて目を見開くヴィヴィオ

「もしかして・・・見ました・・・？」

「うん・・・見た・・・ハヤトの写真だよね？あれ」

写真の青年の名前をズバリ言い当てられ、ヴィヴィオとなのは、フエイトも驚く

「綾人君、ハヤト君を知ってるの!？」

「ええ、まあ……あいつ、訓練校時代の後輩ですから……スバルやティアナも」

「そうなんだ……」

綾人の説明に「そういえばそんな事聞いたような……」と呟くのは

「それに、ヴィヴィオちゃんのこともし少しだけ聞いている。ティアナ達から」

「ティアナさんから?」

「君が、ハヤトのことを好きなんだってね?」

「!!!?」

綾人に言われ、一瞬で顔を赤くするヴィヴィオ

「二人にも相談されたよ。ヴィヴィオちゃんとハヤトのこと」

「そうなんですか……」

肩を透かして言う綾人に俯きながら答えるヴィヴィオ

「ま、俺としても後輩からの頼みには答えてやりたいしな。だから、二人の協力を引き受けたんだ」

「それって……」

「つまり……」

綾人の言葉に互いに顔を見合わせるなのはとフェイト

「ヴィヴィオちゃんの思いをハヤトに届かせるお手伝いをさせてもらいたい」

「あ……」

驚いて顔を上げると、にっこりと笑う綾人の顔があった

「俺でよければ、協力するし……相談にも乗るからな？」

「は……はい!! ありがとうございます!!」

満面の笑顔で頭を下げるヴィヴィオ

「よかったね、ヴィヴィオ？」

「うん!!」

フェイトにも笑顔で答える

「でも、本当にいいの？ 綾人君もお仕事とかあるんじゃないの？」

「ええ、大丈夫ですよ。しばらくは、俺もミッドでの仕事に集中するので」

心配するなのはに答える綾人

「あ、そうだ」

そして、何かを思い出した綾人

「そういえば、ヴィヴィオちゃん？」

「あ、はい？」

「スポーツジムから出てきたけど……何か、スポーツやってるの？」

生徒証を落としていったのがジムの前、小さい女の子が出てきたの

で印象に残っていた

「えっと・・・ストライクアーツを・・・少し・・・」
「へっ・・・」

少し、顔を赤くしながら答える

「基礎をスバルさんに教えてもらって・・・独学でやってたんですけど・・・友達にも時々指導を・・・」

「今日も、20人抜きしたんだよね？」

「20人!? すごいな」

「えへへ・・・」

なのはの言葉に素直に感心する綾人と、照れ笑いするヴィヴィオ

「それなら、俺もその内手合わせしてもらおうかな？」

「ふえ!？」

少し、意地悪く言う綾人に驚くヴィヴィオ

「まあ、それは置いといて・・・ヴィヴィオちゃん？」

「はい？」

「一つ聞いてもいいかな？」

「なんですか？」

少しだけ声の質を変える綾人

「一番気になったこと、そしてどうしても知っておきたかった質問をする」

「ヴィヴィオちゃんは、ハヤトのどこが好きなんだ？」

綾人の質問に少し顔を赤くして、手を胸の前でもじもじさせながら話し出すヴィヴィオ

「えつと・・・おにーちゃんはエツチだし、意地悪だし、友達と一緒にになって私の事をからかったりするんですね。そゆトコは、ちよつと嫌いです・・・」

「あゝ・・・それは確かにな」

後輩をからかっている自分のことを棚に挙げて同意する綾人

スバルやティアナ辺りから「お前が言うな！」と言われそうであるがそれはさておき、ヴィヴィオはそのまま言葉を続ける

「でもでも、私が困ってる時はいつだって助けにきてくれるんです！それに、凄く優しく頼りになるし、頭も良いし、カッコイイし、作ってくれるご飯は凄く美味しい・・・なんていうか、おにーちゃんの全部が大好きなんです！」

はにかみながらそう答えたヴィヴィオ
大絶賛である

「そ、そつか・・・全部か・・・」

「はい!!」

笑顔のヴィヴィオに若干苦笑いの綾人
なのはとフェイトも笑顔で見守っている

「と、とりあえず、出来る限りの協力はするよ。何かあれば連絡してきていいからね？ はい、これ連絡先」

「あ、はい!!」

メモ用紙を取り出してヴィヴィオに手渡す

「それじゃあ、俺はこれでお暇しますね？」

「うん！ 今日ありがとう」

「気をつけてね？」

立ち上がる綾人を見送るのは達

「またね？ ヴィヴィオちゃん」

「はい！！」

「それじゃ、失礼します！」

「「うん！」」

三人に別れの挨拶を済ませて、帰宅する綾人

【綾人SIDE】

高町家を出て自宅への帰り道・・・

「素直ないい子だな・・・ハヤトにはもったいないくらいに」

ハヤトのことを話す時のヴィヴィオの顔を思い出す
とても活き活きと話していた印象がある

「ふむ・・・とりあえず、今度ハヤトに会ったら一発ぶん殴ろう」

とんでもないことを考えながら帰宅する綾人だった・・・

第2話 とある少女との出会い（後書き）

どうも！！

第2話でした！

さあ、二人の中心人物に出会い、いよいよ本格介入が始まる・・・はずなのですが、展開としては少しずつ慌てずにゆっくり進む予定ですのであしからず

さて、今回綾人君がヴィヴィオにした質問と答えですが、ラモン先生にも協力いただき、ヴィヴィオの答えを考えていただき、それを少しだけ手を加えさせていただきました

ヴィヴィオは本当にハヤト君が大好きなんですネ・・・

綾人君は、この話の後、ハヤト君の所に行ったようです・・・ハヤト君・・・生きてるといいな・・・

では次回予告！！

それは、何気ない一日・・・

少女は学校へ・・・青年は仕事へ・・・

「大好きだよ！！」

「わくってるよ！ そんじやな！」

次回、「とある少女と青年達の一日」

次回には、色々なキャラが登場します!!

第3話 とある少女と青年の一日（前書き）

第三話です

自分でも何故こうなったのかわかりません・・・

第3話 とある少女と青年の一日

一面に広がる花畑

その中に居る金髪の青年に向かって、一人の少女が走っていく・・・

「おにいちゃん!!」

「おう! ヴィヴィオ!!」

少女、ヴィヴィオの声に振り向き、手を上げて答えるハヤト

「どーん!!」

「ぐうえ!!」

口で発した衝撃音と共に後ろに飛ぶハヤト

六課時代、まだ小さい頃のヴィヴィオが幾度と無くハヤトに食らわしてきたタツクルである

「お前な〜!!」

「えへへ〜!!」

倒れながら仕方ないと笑い、ヴィヴィオの頭を撫でるハヤト

「あのね・・・お兄ちゃん・・・わたしね・・・?」

「ん?」

起き上がるハヤトに向かって、顔を紅くしながらもじもじするヴィヴィオ

「わたしは・・・お、お兄ちゃんのこと大好きです! わたしを・

「・・・お兄ちゃんの恋人にしてください!!」
「・・・・・・・・」

ヴィヴィオの一世一代の告白にキョトンとするハヤト

「何言つてんだよ？ お前は」

「あ・・・」

笑いながら頭を撫でてくるハヤト

「恋人なんて無理だろうが・・・」

そして、優しく答える

「そうだよね・・・」

ヴィヴィオの顔も曇る

「だって、ヴィヴィオは俺の・・・お嫁さんだろ？」

「・・・・・・・・え？」

突然の一言に、今度はヴィヴィオがキョトンとする

「ええ！？ わ、わたしが・・・お兄ちゃんの・・・お嫁さん!？」

「なんだよ・・・高町一尉や、ハラオウン執務官にもOKもらえたのに・・・ヴィヴィオは嫌なのか？」

ハヤトの言葉に思いつきり首を振るヴィヴィオ

「ほら・・・」

「あ……」

優しくヴィヴィオの顔に手を添え、顔を近づけていくハヤト

そして、二人の影が重なる瞬間

「ふみゆ!?!」

突然、顔面に襲ってきた衝撃に驚くヴィヴィオ

「うう〜?」

鼻を押さえ、涙目になりながら周りを見ると、見慣れた自分の部屋だった

「夢……?」

さっきまでの映像が夢だったことを知り、がっかりするヴィヴィオ

「そうだよね……そんな訳ないよね……」

そのまま窓の外を見る

「ヴィヴィオ〜! さっきの音なんなの〜?」

下で朝食の準備をしていたのはがドアを開けて中を覗いてくる

「あ、ママ! えへへ……ベッドから落ちちゃった……」

「大丈夫?」

「うん！」

心配するなのは余所に笑顔で答えるヴィヴィオ

「そ。それじゃ、早く着替えて、朝ごはんにしよう？」

「はい！！」

なのはに答えて着替えを始めるヴィヴィオ

着替える途中、何回か先ほどの夢を思い出しては顔を紅くしていたのは、ご愛嬌……

クラナガンから快速レールウェイで、一時間ほどの郊外に存在する聖王教会の系列のミッションスクール『ザンクトSet・ヒルデ魔法学院』

その学院の初等科の教室で、ヴィヴィオは一人、生徒証を見てニヤニヤしていた……

「ヴィヴィオ？」

「あ、コロナ！」

声をかけたのはヴィヴィオの一年生の頃からの親友である『コロナ・ティミル』

「また見てるの？」

「うん！！」

笑顔で答え、自分の生徒証を見せる

そこには、無邪気に笑っているハヤトの写真が張ってある

「ヴィヴィオ、お兄さんのこと本当に好きだよね？」
「うん！ 大好きだよ！！」

コロナの質問にも満面の笑みで答えるヴィヴィオ
ヴィヴィオの言葉に、他の男子生徒の何人かは悔しそうな顔をして
いた

「そつだヴィヴィオ。今日は土曜日だし、どこかに行かない？」
「あ、ごめん。今日は行くところがあるから」

手を合わせて謝る

「いつものお見舞い？」
「うん！」

笑顔で答えるヴィヴィオ

数ヶ月前、とある事件がきっかけで知り合った自分と同じ先史時代の
ベルカの王であり友達の、冥王『イクスヴェリア』のところに行
く予定なのだ

現在は永い眠りについており、会っても話は出来ないが、それでも
一ヶ月に二度位には会いに行っている

「そつか・・・なら、しょうがないね」
「ごめんね？」
「ううん。いいよ」

謝るヴィヴィオに笑顔で許すコロナ

コロナはもちろん生徒のほとんどが、ヴィヴィオが『最後のゆりかごの聖王』を素に作られた人造魔導師素体であることを知っていて、少しだけ周りとの距離がある

しかし、コロナは自然に接してくれていて、ヴィヴィオもそんなコロナが大好きなのだ

「それじゃあね、ヴィヴィオ。ごきげんよう！」

「ごきげんよう〜!!」

今日は土曜日ということもあり、授業も昼頃に終了する

ヴィヴィオは、校門でコロナと別れて一人、聖王教会へと向かった。

・
・

聖王教会に到着したヴィヴィオは、近くにいた執事服姿の男子・
・もとい、女の子とシスター服姿の女の子二人に声をかける

「オット〜!! デイード〜!!」

「あ、陛下。ごきげんよう」

「ごきげんよう、陛下」

ヴィヴィオに気が付いて出迎える二人

元ナンバーズの『オットー』と『デイード』

顔がそっくりの双子である（体つきは天と地ほどの差があるが……）

「ん……?」

「オットー、どうしたの？」

「なにか、嫌な感じが・・・」

「気のせいでは？」

「うーん・・・」

妙な電波を感じたオットーは、複雑な表情で考え込む

そんなオットーを尻目にヴィヴィオに話しかけるデュード

「そんなことより、陛下、今日もイクスのお見舞いですか？」

「うん！！」

「そうですか。」ゆっくり

デュードに見送られ、イクスの眠る部屋へと向かうヴィヴィオ

「お〜？ ヴィヴィオ〜いらっさ〜い！」

「あ！ セインー！！！」

イクスの部屋に入ると、半袖のシスター服を着て、とてもシスターとは思えない挨拶をする元ナンバーズの『セイン』

「イクスのお見舞いかい？」

「うん！」

「そっか！ イクス〜？ ヴィヴィオがきたよ〜」

セインはそのままベッドで静かに眠る少女、イクスヴェリアに声をかける

ヴィヴィオも近付き、ベッドの横に用意されている椅子に座る

「イクス・・・ごきげんよう」

そう言っつて、イクスの手を握り、眼を閉じる

(イクス・・・今日はね?)

イクスに念話のように語りかけ、学校であったこと、最近の近況などを報告していく

(相変わらず、ハヤトお兄ちゃんは鈍感なんだよ・・・)

などと、現在の悩みなんかも打ち明けたり
というか、ほとんどがハヤトに関する話題であるが・・・

(それでね? この間、お兄ちゃんの先輩の綾人さんにも会ったんだ・・・)

話は、綾人のことにも及んだ

(綾人さん、わたしの事応援してくれるって言ってくれて、とっても嬉しかったよ・・・イクスも・・・応援してね・・・?)

それだけ言い終えると、手を離して立ち上がる

「ん? もういいのか?」

「うん。ありがとうね? セイン」

「気にすんな。また来なよ? イクスも喜ぶだろうしさ!」

「うん! ごきげんよう。セイン、イクス!」

挨拶を済ませ、セインと別れるヴィヴィオ

庭園に出ると、デイドが水遣りをしていた

「陛下、お見舞いはもう?」

「うん! いっぱい話したよ!」

「そうですか。もう、お帰りで?」

「うん。ごきげんよう、デイド! オットーにもよろしく伝えてね?」

「はい、承りました。ごきげんよう、陛下」

立ち去るヴィヴィオに深々と頭を下げるデイド

【ハヤトSIDE】

ところかわって時空管理局・地上本部・・・

「さ〜って! メシメシと!」

書類仕事が一段落し、食堂に向かっているハヤト
すると、目の前に見知ったオレンジ髪の姿があった

「およ? お〜っす! ティアナ〜!!」

「あ、ハヤト・・・」

振り返るティアナも少しだけ驚く

「こっちで仕事か?」

「違うわよ・・・面会・・・“あの子”の

「あ〜・・・」

ティアナの言葉に納得するハヤト

ティアナの言う“あの子”とは、「マリアージュ事件」でティアナの副官をしていた『ルネツサ・マグナス』のことである

「マリアージュ事件」の折、ティアナによって逮捕され、現在はこの地上本部に収監されている

ハヤトも、ティアナと一緒に捜査をしたため、彼女のことも知っている

「あんたもこれからお昼？」

「フーことは、お前もか？」

「ええ」

「ふくん・・・それなら一緒に食うか？」

「別に構わないわよ？」

「んじゃ、食堂に行きますか」

二人で並んで廊下を歩いていく

ルネツサやティアナの近況なんかの話をしていると、ふと思い出したようにティアナを睨むハヤト

「そういえばティアナ。この間、天童先輩に会ったんだろ？」

「ええ。スバルも一緒だったけど」

「そんな時、俺が規定訓練してんのあの人に喋ったろ？」

「ええ、それが？」

訳がわからないのか、首を傾げて聞いてくるティアナ

「『それが？』じゃねえよ！ あの人、わざわざ俺のところに来て、俺のことフルボッコにして行ったんだぞ！？」

「別に、今に始まったことじゃないでしょ？ 訓練校時代だって、結構扱かれてたじゃない？ 私達三人とも」

ティアナも遠い眼をしている

訓練校時代、ハヤトと行動を共にしていたスバルやティアナも綾人に相手をしてもらったことがあった

それぞれ一人ずつだったり、時には三人同時に相手をしたこともある三人がかりで相手にしても、綾人に攻撃が入ったことはほとんど無く、模擬戦での戦績は綾人の勝ち越しである

現在の自分達の力量ならば、少しぐらい差は縮まっているだろうがそれでも、ティアナは勝てそうな気がしないのだ

「結局、俺のことボコボコにして、直ぐに帰ったけど・・・なんだっただんだ？」

「そのとき、なにか聞かれた？」

「べっつに〜？ 人のトラウマ刺激して、満足したようにさっさと帰ってた」

「そう・・・」

綾人がハヤトに会いに行った理由を知っているティアナ

最後に会ってからは、綾人からなんの連絡も無いので少し気になっていたのだが、ハヤトの口ぶりから、あまり踏み込んだ話はしていないと感じた

「どうした？」

「別に、なんでもないわよ」

そんな話をしていると、あっという間に食堂に到着した

「さっつてと！ 何にすつかなく？」

メニューを見ながら考えるハヤトの横で

「あ、私Bランチで」

「はい！」

さっさと注文を済ませるティアナ

「早！？ お前、もうちよつと悩まね？ こんだけ種類あるのに・・」

「自由でしょ？ いいからあんたもさっさと選びなさい？ 席とっておくから」

それだけ言うと席をとりに向かうティアナ
何気に、自分の分を運ぶように仕向けている

ティアナのとつてくれていた席に付き、食事を始める二人

「で・・・結局、私と同じものなのね」

「うっせ。財布との協議の結果だ」

「ゲーム買うお金減らしたら、問題ないんじゃないの？」

「そんなことするくらいなら、食費を削るね」

ティアナの提案に即答するハヤト

さすがにティアナも呆れてしまう

ゲーム>その他の思考は、おそらく何年経っても変わらないのだろう

そんな風に話も弾む

ティアナとしてもハヤトと一緒に食事が出るのが、少しだけ嬉しかったりもしていた

「それじゃ、私も仕事に戻るからね・・・あんたもサボるんじゃないわよ？」

「わくってるよ！ そんじゃな！」

背を向けながら手を振り、廊下を歩いていくハヤトを見送るティアナ

「私って、案外未練がましいかも・・・」

その呟きは、ハヤトには届かなかった・・・

第3話 とある少女と青年の一日（後書き）

どうも

更新状況を変えた途端の投稿です！！

ヴィヴィオとハヤト君の一日をそれぞれ書いてみました

冒頭のヴィヴィオの夢・・・これが、s u f f i aのクオリティだ！
！ラモン先生ほど甘いものは書けません・・・

この小説の時間軸としましては、本来「マリアージュ事件」が起こったのは「夏」ですが、設定・展開上の都合により、この小説では「初春」と、ずらしています

今回は綾人君は名前だけの出演ということ・・・そして、この小説でもチート化が進んでいる模様です

今後、ハヤト君とヴィヴィオ関連で起こりうるイベントは以下のとおり

・食事情を心配したヴィヴィオと、高町家にて一緒に夕食・・・
(もしかしたら二人っきりの可能性も)

・風邪を引いたハヤト君の看病をするヴィヴィオ

・綾人君やティアナなどの策略により行われるハヤト君とヴィヴィオの遊園地デート

などなど・・・

他にも面白そうないイベントがあれば感想などに書いてください。検討してみますので

では次回予告

いつものように仕事を終え、夕食を買いに行ったハヤトは、なのはに頼まれ、お使いに向かうヴィヴィオと出会う
そして、一緒に買い物をする事になったが・・・

次回、「とある二人の買い物デート？」

今回は、ようやく二人が一緒に出てきます

P.S.

以前、ラモン先生にも相談したのですが、この小説のOPとEDを考えております

一応、私とラモン先生の考えているのは以下の通りです

OP

POP MASTER (水樹奈々)

shinning star (9nine)

マジックナンバー (坂本真綾)

ED

Tiny Rainbow (田村ゆかり)

ここでキスして (椎名林檎)

それが、愛でしょう (下川みくに)

inci・beg rock

と、なっております

他にありそうでしたら、こちらも送ってくださいね

第4話 とある二人の買い物デート？ (前書き)

4話です

今回、よつちやくハヤト君とヴィヴィオと一緒に登場します

第4話 とある二人の買い物デート？

「さっつて！ 仕事も終わつたし、帰るとしますか〜！」

大きく伸びをしながら言うハヤト

大きな事件も無く、結婚相手の書類仕事との時間も終わって帰路に付こうとする

「あゝ・・・そういや、冷蔵庫の中身が切れてたな・・・買いに行くか・・・」

寮の部屋に備えてある冷蔵庫に備蓄している食料の量を思い出し、少し遠回りしてスーパーへと向かう

「あれ？ お兄ちゃん？」

「ん？」

声に振り向くと、そこには買い物籠を持ったヴィヴィオがいた

「こんなトコでどうしたの？」

「買い物だよ・・・常備食が切れたからな・・・ヴィヴィオは？」

「わたしもお買い物!!」

籠を見せながら笑顔で答えるヴィヴィオ

「そつか・・・えらいぞ〜ヴィヴィオ〜？」

笑いながらヴィヴィオの頭を撫でるハヤト

「むっ!! 子ども扱いしないでよっ!!」

顔を紅くしながら抗議するヴィヴィオ
内心ではかなり喜んでい

「そんじゃ、行きますか」

「え？」

それだけ言うときささと歩き出すハヤト
ヴィヴィオもキョトンとしている

「なぐにやってんだ？ 置いてくぞ？」

「一緒に？」

「そうだよ。どっせ、行き先は同じなんだし。ほれ、行くぞ？」

「うん!!」

ハヤトが笑いかけると、ヴィヴィオも満面の笑顔で頷きハヤトと並
んで歩き出す

「何買うんだ？」

「えっと・・・にんじんと、じゃがいもと、玉ねぎと、牛肉と・・・」

なのはにもらったメモを見ながら確認するヴィヴィオ

「なんだ、カレーか？」

「ううん。ビーフシチュー！」

ラインナップから料理を推理したハヤトだが、ヴィヴィオが手でパ
ツを作りながら教える

「いや、一緒だろ？」

「一緒じゃないよ!!」

「一緒だって」

「違うもん!!」

なんて言い合いをしつつ、スーパーへと到着した二人だった・・・

「さて、到着つと」

「むう・・・」

ヴィヴィオに振り返るハヤトだが、当の本人はすっかりむくれていた

「いい加減機嫌直せ？」

「一緒じゃないんだもん・・・」

むくれながらもいい続けるヴィヴィオ
ハヤトもさすがに苦笑いである

「はいはい・・・違いまちゅね」

そう言ってヴィヴィオの頭を撫でる

「むっ!!」

撫でられ、顔を紅くしながらハヤトを睨むヴィヴィオ

「それより、早く買わね〜とな？ 高町一尉も待ってんだろ？」

「……うん」

なのはの名前を出されて渋々ながらも頷き、中に入っていくヴィヴィオとハヤト

「あれ？ お兄ちゃん、お肉とかはこっちだよ？」

ハヤトが別の棚に向かう途中でヴィヴィオが呼び止める

「俺はこっちでいいんだよ」

そう言うと、ハヤトは奥へと向かう

「えっと……とりあえず今日の分の夕食は……これでいいか」
惣菜コーナーにある弁当を一つ取る

「あとは、日持ちするインスタント麺と、レトルト品……っと」
次々とカゴに入れていくハヤト

「む……」
「ん？」

カゴに次々と放り込んでいくハヤトを見ていたヴィヴィオが唸る

「どした？」

「お兄ちゃん！ そんなに体に悪いものばかり！ 栄養のバランスを考えて食べないとダメだよ！」

「だいじょくぶだつて！」

「ダメ！」

ヴィヴィオは、ハヤトの体を心配して言っているのだが、当のハヤトは気にせずにカゴに放り込んでいくが、ヴィヴィオが次々と柵に戻していく

「なにをする!?!」

「ほら！ 今日はお肉が安いんだから！！」

そう言つて、ハヤトのカゴに肉のパックを大量に放り込むヴィヴィオ

「いやいやいや！！ スバルやギンガじゃあるまいし、こんなに食べねえから！！」

「ハヤトお兄ちゃんだったらだいじょくぶ！」

「なにゆえ!?!」

ヴィヴィオの意味不明な物言いに啞然とするハヤト

「それに、栄養云々言う割りに、これじゃバランス悪すぎる・・・

」

「だから、その分野菜を三倍食べるんだよ！！ 常識だよ？」

「それは、ナカジマ家の常識だ!?!」

偏っているのは、栄養よりもヴィヴィオの知識かもしれない・・・

とりあえず、普通のパックで妥協してもらい、この場を切り抜けたハヤト

「ところで、ヴィヴィオの買い物はいいのか？」

「あ……そうだった……」

ハヤトの買い物にあれこれ言っていて、すっかり自分の買い物を忘れていたヴィヴィオ

「ほれ、さつさと済ますぞ?」

「うん!」

ハヤトに促され、自分の買い物始めるヴィヴィオ

「えつと……これと、これと……」

メモを何度も見ながら野菜などをカゴに入れていくヴィヴィオ
ハヤトもヴィヴィオに言われた食材を見つけて渡していく

「次は?」

「えつと……タマゴ!」

「ほいよ」

短く返事を返して、タマゴ売り場へと向かうハヤトとヴィヴィオ

「あれ? ハヤトとヴィヴィオちゃんじゃないか」

「えつ?」

後ろからの声に、二人同時に振り向くと

そこには、二人のよく知る人物が居た

「天童先輩!」「綾人さん!」

「よ!」

手を上げて挨拶をする綾人

「何してるんスカ？ こんな所で・・・」

「ここですることなんて一つしかないだろ？」

肩を竦めて手に持っているものを見せる綾人
手には野菜やらの入ったカゴが握られている

「買い物ですか？」

「ああ、今夜の夕食の材料を買いにね？」

「あれ？ 先輩ってヴィヴィオと面識ありました？」

普通にヴィヴィオと会話する綾人を見たハヤトは首を傾げて聞く

「ああ、この前知り合ったんだよ。な？」

「はい！」

「ふん・・・」

返事を返すヴィヴィオにそれだけしか言わなかったハヤト

「タマゴ買うのか？」

「あ、はい」

「なら、もう少し待ったほうがいいな」

「なんでですか？」

綾人の提案に首を傾げるヴィヴィオ

「もうすぐ『タイムセール』で、タマゴも割引対象だから・・・
見てみな？」

「ん？ っお！？」

綾人に言われて周りを見てみるハヤト
すると、タイムセール目当てのマダム達がタマゴ売り場やそのほか
の棚に集まりだしていた

「あ……あの……これは？」

「試合開始の銅鑼の音を待っている歴戦の兵達つわものさ……」

棚を取り囲むようにして待機しているマダム達……

「つて言うか、棚の前で待ってたらいいんじゃない？」

「バカ。それはしちやいけないんだよ」

“皆、平等にチャンスを！”が暗黙のルールになっているのだ

「綾人さんも……これに……？」

「もちろんさ」

ビビりながら聞くヴィヴィオにニヤリと笑いながら答える綾人

「お、来たな……」

「えっ？」

綾人が言うと、周りの空気が変わった……

緊張の面持ちで近付いてくる店員

手には『割引シール』なるものが握られ、タマゴに貼られていく……

それを見た綾人をはじめとするマダムたちも戦闘態勢に入る

「あわわわわ・・・！」

「なにこれこわい」

傍にいたハヤト、ヴィヴィオは震え上がってしまい、避難する

全て貼り終え、店員が一步前が出る

「それでは・・・お一人様、2パックまでとさせていただきます・・・
・よろしいですね？」

それを聞き、頷く兵達

深呼吸する店員

「よゝい・・・スタート!!」

合図と共に駆け出す兵達

その瞬間、店内は戦場と化した・・・

「ひびき!!」

ヴィヴィオとハヤトは、隅の方で縮こまっていたが

数秒後・・・

「ふう・・・戦果は上々つと」

戦場から、悠々と戻ってくる綾人

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、慣れてるしな？ はい！」

そう言っつて、タマゴのパックを差し出す綾人

「え？ でも……」

参加していない自分が受け取れないと渋るヴィヴィオだが

「気にすんな？ あの中にはいけないだろ？」

目線を戦場に向ける綾人

いまだに紛争は続いていた

「はい……」

ヴィヴィオも神妙な顔で頷く

「高町一尉も、こんな経験してんのかな……」

「多分……」

ハヤトの言葉に、ヴィヴィオも複雑な顔をする

もし、この戦場にあの『エース・オブ・エース』がいたら……？

必死の形相でタマゴやらお肉やらを取り合っている高町なのは……

とっつても嫌である

「ま、今回はいい勉強になっただろ？」

「はい……」

「できれば、経験したくなかったっす……」

その後、綾人も加わって残りの買い物と会計を済ませて店を出た

「しっかし、トンデモね〜な・・・タイムセール・・・」
「うん・・・」

いまだに恐怖が消えないハヤトとヴィヴィオ

「アレぐらいなんでもないぞ？ 年末とかのセールはもっと混沌と
してるしな」

さらに嫌な現実を教えてくる綾人

「ところで、綾人さん」
「ん？」

「いつも夕食とかって、どうしてるんですか？」
「自炊してるけど？」

ヴィヴィオの質問に普通に即答する綾人

「一人暮らしだから作らなきゃいけないし・・・昔から、料理は好きだしな」
「そうなんですか・・・聞いた？ お兄ちゃん」
「だから？」

綾人の言葉に頷きながらハヤトに振り返るヴィヴィオ

「ハヤト。どうかしたのか？」
「聞いてくださいよ綾人さん！ お兄ちゃんったら・・・」

不思議そうにハヤトに聞こうとする綾人だが、先にヴィヴィオが先ほどの買い物での出来事を話してくる

「・・・で、カップ麺とかを買ってるんですよ？」

「しょうがねーだろ？ 仕事で疲れてなのに、飯作ってる暇なんかねーんだから・・・」

「でも、綾人さんも自炊してるって！」

「先輩と俺とじゃ仕事の量が違うんだよ！」

「まるで、俺が働いてないみたいだな・・・」

ヴィヴィオとハヤトの言い合いを横で聞きながら苦笑いの綾人

「まあ、ハヤトの言い分も分かるけどな・・・」

執務官の仕事柄、生活習慣も少しずれたりするため、自炊は難しいことをティアナ辺りからも聞いて知っている綾人

「あ、そうか・・・」

「「？」」

綾人は何かを思いつき、ポンと手を打つ

「ハヤト、それならヴィヴィオちゃんの家でこ馳走になったらどうだ？」

「は？」 「ふえ？」

綾人の提案にキョトンとするハヤトとヴィヴィオ

「それで、万事解決するだろ」

「なにが解決するんすか!？」

「ハヤトは栄養のバランスが抜群な食事でありつけて、ヴィヴィオちゃんの心配も減って一石二鳥・・・いや、高町一尉の手料理も食べられて三鳥か・・・何か問題でも？」

「大アリでしょ!？」 高町一尉にも迷惑でしょ!？」

必死に抗議するハヤト

「案外、了承するかもよ？」

「そんなバカな・・・」

うな垂れるハヤト

しかし、おそろくなのはは笑顔で了承するだろう

もしかしたら、変な理由をつけてヴィヴィオと二人っきりにしてくれるかもしれない

そんなことをなのはに期待してみる綾人

「ちよつと聞いてみます!!」

「はえ？」

ヴィヴィオは大慌てで自宅に電話をかける

『はい。高町です!』

「あ! ママ? あのね・・・」

直ぐに応答したなのは

そして、ヴィヴィオはなのはにハヤトの食事情と綾人の提案の説明を始める

それを聞いたなのはも、少し考えた後

「うん！ お兄ちゃん？　なのはママが代わってって」
「あ……ああ」

ヴィヴィオに呼ばれて、電話を受け取るハヤト

「もしもし、ハヤトです」

『あ！　ハヤト君！　久しぶり！！』

「はい。お久しぶりっス……高町一尉」

『うん！　ハヤト君も元気そうだね？』

「ええ。元気を取り柄っスから……それで……その〜」

挨拶を終え、ヴィヴィオとの会話を聞こうとするハヤトだが

『ヴィヴィオから聞いたけど、ウチは別に問題ないよ？　だから、ハヤト君さえよかったら、ウチで一緒にご飯食べない？』

なのはは、ハヤトにそう持ちかけた

電話の向こうからでも、笑顔で言っているのが伝わるように

「え！？　でも……いいんスか？」

『もちろん！！』

なのはの顔があれば、満面の笑みで答えてくれているのだろう

「あ……じゃあ、その……ご馳走になります……」

遂に観念したのか、頭を下げるハヤトだった

『うん！！……あっ、そうだ。綾人君もそこにいる？』

「ええ。いますけど・・・」
「ん？」

なのはは、急に綾人の名前を出し、ハヤトも綾人のほうを見る

『ちよつと悪いんだけど、綾人君にも代わってくれるかな？』

「はあ・・・わかりました・・・先輩？」

「なんだよ」

「高町一尉が代わって欲しいって」

「俺にか？・・・もしもし？」

『あ、綾人君？ 良かったら、綾人君も一緒にどうかかな？』

「はい？」

電話に出るなりそう言われ、首を傾げる綾人

「俺も・・・ですか？」

『うん！ 食事は大勢のほうが好きだね！』

「・・・分かりました。ご馳走になります」

なのはの提案に答える綾人

『うん！ それじゃ、待ってるね？』

「はい。失礼します」

『うん！』

そう言って、電話を切る綾人

「なんか、俺も誘われてしまった・・・」

「そうなんですか？」

「ああ・・・」

ヴィヴィオに電話を返しながら、さっきの会話を教える綾人

(予定は少し狂ったけど・・・まあ、結果オーライ・・・かな?)

自分の考えていた状況にはならなかったが、そう納得することにした綾人

「しかしまゝ、高町一尉も太つ腹だね〜！」

「それ、本人の目の前で言ってみ？ 『お腹が太いですね〜』って」「俺に死ねと!?! つゝかそんな事言っていないですよね!?!」

高町家に向かう途中、ハヤトとそんな会話をしている綾人

さすが綾人、誰も言えないようなことを平気で言っただけの男である

「ヴィヴィオちゃん？」

「あ、はい？」

少し前を歩くヴィヴィオに近付き、声をかける綾人

「まずは、第一歩・・・かな？」

「はい!~!」

「何がっスか？」

綾人とヴィヴィオにしか分からない会話に、ハヤトも首を傾げる
すると二人は

「秘密!」「秘密だ」

笑いながら、声をそろえて答えるのだった・・・

「あ、ヴィヴィオちゃん、悪いんだけどさ・・・」

「はい？」

「これ・・・家に置いてきていいかな？・・・生ものもあるからさ・・・」

「あ、俺もだ・・・」

手に持った袋を見せながら苦笑いの綾人とハヤト

「ハヤトの分はウチで預っておくか・・・さすがに時間が掛かる」
「頼みます」

その後、一度綾人の自宅によってから、高町家へと向かった・・・

第4話 とある二人の買い物デート？（後書き）

どうも！

と言うわけで、二人のお買い物という名のデートをお送りしました！

まあ、綾人君も何気に登場してきましたが

ミッドにもあるんですかね・・・タイムセール・・・

綾人君の主夫っぷりを出してみたかったのでやってみましたが・・・
タイムセールで戦うわれらが「エース・オブ・エース」・・・嫌過
ぎる！

こちらの綾人君も、思ったことは口に出す傾向にあります

では、次回予告・・・

なのはの提案により、高町家にて夕食を一緒に食べることになった
綾人とハヤト

楽しい食事、そのなかには笑顔が溢れていた・・・

「お前のほうが適任だ・・・な？」

「ハヤト君なら、ヴィヴィオを任せられるよ！」

次回、「とある母娘おやこと夕食を」

今回は、どちらかと言うと綾人君がメインかもしれないね・・・

ところで・・・P.Vが20000件を突破いたしました！！
たったの三話で突破・・・嬉しい限りです！！

なにか、記念をやるうと考えたのですが、始まったばかりでやるのもどうかと思いましたが、今回は見送りたいと思います！

物語が進み、綾人君が馴染んできたかな？つてくらいでやるうと思
います！

どんなことをしようか悩みますね・・・とりあえず今考えているのは

・綾人君とハヤト君たちとの出会い

綾人君やハヤト君が訓練校にいたところのお話

・元機動六課前線メンバー+綾人君の陸戦エキシビション

本局のダブルエース、夜天の主と守護騎士、六課のストライカー、
そして綾人君による「Vivid」でも行われた陸戦エキシビション

・座談会

なにもなく、「信念」などで行われているもの

他に何かあれば、お寄せ下さい・・・

それでは！！

第5話 とある母娘（おやじ）と夕食を（前書き）

さて、今回はなのはさんとヴィヴィオの二人と食事です

第5話 とある母娘（おやこ）と夕食を

ヴィヴィオにつれられ、高町家へと訪れた綾人とハヤト

「ただいま〜！」

「お帰り！ ヴィヴィオ」

「なのはママ!〜！」

リビングから出てきたなのはが笑顔で出迎える

「ハヤト君と綾人君も、いらっしやい！」

「お久しぶりっス！」

「お邪魔します」

二人も頭を下げる

「それじゃ、ヴィヴィオ。籠はテーブルに置いておいて着替えきてね？」

「は〜い！」

ヴィヴィオは返事を返すと、リビングへと入っていった

「すみません・・・突然・・・」

「いいよ。気にしないで？」

謝るハヤトに笑顔で答えるなのは

そのまま、二人をリビングに案内する

「とりあえず、直ぐに準備するから、座って待ってて？」

「あ、手伝います」

「いいからいいから！」

手伝おうとする綾人を手で制して、キッチンに立つのは

「え〜っと・・・うん・・・うん・・・よし！ 全部オツケ〜！」

籠の中身を確認し終え、頷く

「タマゴもすっかり買ってあるし、これで明日の朝食も大丈夫だね」

「！〜！」

「タマゴ」という単語に、肩を震わせるハヤト

どうやら、先ほどの光景を思い出したようだ

「お待たせしました！」

着替えを終えたヴィヴィオがリビングに戻ってくる

手には、なにやらノートが握られている

「なんだ？ 宿題でもするのか？」

「そうだよ〜？」

「ほんと、ヴィヴィオちゃんはしっかりしてるね〜」

「ありがとうございます〜！」

綾人に褒められ、素直に喜んでいるヴィヴィオ

そして、ノートを開いて宿題を始める

「無限書庫の司書資格までとって、さらにはストライクアーツまで
って・・・やりすぎじゃね？」

「そんなことないさ。今のうちに、興味の出たことを一生懸命やってみるのもいい。いろんな経験が、後々役立つたりもするしな」

「そーゆーもんですか？」

「そーゆーもんだよ。特にヴィヴィオちゃんの場合は、どれも好きでやってることだろ？」

「はい、そうですね・・・」

「そのおかげで、お友達も出来てるしね？」

ヴィヴィオたちの話を聞いていたのはも、料理をしながら声をかけてくる

「だったら、そのまま続けてもいいと思うよ」

「はい！」

綾人の言葉に頷くヴィヴィオ

そして、ノートを閉じる

「はい！ 宿題しゅくりよー！！」

「くく早！？」

なんと、ヴィヴィオは綾人達と会話しながら宿題をしていたのだった。これにはハヤトを始め、綾人やなのはも驚いてしまう

「どれどれ・・・お・・・」

「って言うか先輩、内容分かるンスか？」

ノートを見ながら頷いている綾人にそう聞くハヤト

「さっぱりわからん！」

「ありゃ」

綾人の堂々とした答えにずっこけるハヤト

「さて！ それでは、明日の準備も済ませてきます！！！」

「あ・・・うん」

ヴィヴィオは綾人からノートを返してもらい、再び部屋へと戻っていった

「ありや・・・将来有望だ・・・」

「まったく・・・」

「にはは・・・」

呆れた顔でヴィヴィオを見送る男二人

「あれで、男を見る目があればな・・・」

「なんスか？ それ」

「なんでもないよ」

ため息混じりに呟いた綾人の言葉に首を傾げるハヤト

「はい！ どうぞ！！！」

数分後、なのはがビーフシチューの入った皿を各席に回していく

「お～！！！」

「おいしそうだな」

ハヤトはなのはの料理に感激し、綾人は料理の出来栄に感心して

いた

「それじゃ、手を合わせて・・・」

「・・・いただきます!」「」「」

ミッドにはあまり伝わっていない地球の風習だが、ヴィヴィオはなのはにそれを習い、ハヤトも、機動六課時代にそれを知った

綾人は、元々地球出身なので、とても自然だった

ちなみに席の配置は、なのはと綾人が隣同士で、ハヤトとヴィヴィオが向かいで隣同士になっている

「それでね? 綾人さんがその中に入っっていつてね?」

「あゝ・・・あそこのタイムセールは大変だからね」

「た、高町一尉も経験者っすか?」

「たまにね? フェイトちゃんとかも何度か行ってると思うし」

「まあ、あそこのスーパー使っってりゃ、嫌でも体験することだよ」

などと、食事中の会話も弾む

「そっいえば、綾人さん?」

「なんだい?」

「ビーフシチューとカレーって違いますよね?」

「またその話が・・・引っ張るね」

スーパーに着くまで激論を繰り広げていた話に、ハヤトも肩を竦める

「違うな」

そんなヴィヴィオの質問に答える綾人

「一般に、カレーは「カレールー」を煮込んで作られるが、ビーフシチューは「デミグラスソース」を煮込んでいるんだ。他にも色々な違いがあるけども、他の材料が同じだとしても、全然違う料理なんだよ」

「……へえ〜」

綾人のどうでもいいウンチク

「詳しいんだね・・・綾人君」

「まあ、料理は趣味の一つですからね・・・こういう知識は持っている損はありませんしね」

だからといって、ウンチクまで取り込むのはどうかと思われるが

「ほら！ お兄ちゃん聞いた？」

「聞いたけどさ・・・」

「わたしが正しかったんだよ！！」

「あ〜はいはい・・・よかったね〜」

「むう・・・」

などと、勝ち誇っているヴィヴィオを軽く流しながら食事を再開するハヤト

(ほんと・・・こうしてると、普通に兄妹なんだよな・・・)

そんな二人を見て、綾人はそう思った

(・・・後は、ヴィヴィオちゃんの真剣な気持ちをしっかりと伝えること・・・かな?)

今後の方針を、なんとなく定めた綾人だった

「「「ごちそうさまでした！」「」」

「はい！ お粗末さまでした！」

食事を終え、各自の皿を回収していくのは

「さて！ それじゃママ、魔法の練習に行ってくるね？」

「あ、うん！ 気をつけてね？」

立ち上がり、なのはにそう告げると出かける準備を始めるヴィヴィオ

「魔法の練習？ こんな時間からかい？」

「はい！ 近くの公園で、毎日練習してるんです！」

綾人の質問に笑顔で答えるヴィヴィオ

「危険じゃないのか？」

「大丈夫だよ？ レイジングハートもついてくれてるし」

「No problem（問題ありません）」

ハヤトに教えるなのはの言葉に、自立飛行で浮いているなのはの相棒『レイジングハート』が答える

「いや・・・でも」

「だったら、ハヤトが付いててやれよ？ そしたら安心だろ？」

綾人の何気ない一言にヴィヴィオの顔も明るくなる

「俺ですか？・・・だったら、先輩のほうか・・・」

「俺よりも、お前のほうが適任だ・・・な？」

「あ・・・はい！」

綾人がニヤリと笑いながらヴィヴィオに聞くと、満面の笑みで答えるヴィヴィオ

「そうだね・・・ハヤト君だったら、安心してヴィヴィオを任せられるよ」

「高町一尉まで・・・はあ・・・わかりました・・・行きます」

なのはに信頼されていると分かると、渋々ながらも了承するハヤトなんだかんと言っても、綺麗な女性に信頼されているというので満更でもない様子である

「それじゃ、行ってきまーす！」

「はい！　いってらっしやい！」

「ハヤト、ちゃんと見とけよ？」

「わくってますって！」

なのはと綾人に見送られ、ハヤトと共に市民公園へと向かったヴィヴィオ

【綾人SIDE】

ヴィヴィオ達が出て行った後、なのはと共に後片付けを手伝うことにした綾人

「ごめんね？ 綾人君・・・手伝ってもらっちゃって・・・」
「気にしないで下さい？ やりたいただけですから」

皿を洗いながら会話をする綾人となのは

「それに、ヴィヴィオのことも・・・さっきも、ハヤト君と二人にしてくれようとしたんだよね？」

「ははは・・・俺には、あんな露骨な方法しか思いつきませんけどね？」

「でも、ありがとうね？」

「いいえ・・・」

しばらく沈黙が続く

「ところで・・・」

「ん？」

「高町一尉やハラオウン執務官の二人が、ヴィヴィオちゃんとハヤトが付き合うことを認めているのには、驚きました」

ふと、そう思った綾人

ヴィヴィオは十歳も歳のはなれたハヤトに恋をしている

いくら昔助けてもらったといっても、親もすでに公認であることに少なからず驚いているのだ

「ああ・・・まあね・・・最初は確かに驚いたけど、ヴィヴィオが真剣だつてわかったからね・・・ヴィヴィオが本気なんだつたら、応援しようつてフェイトちゃんと決めただ・・・」

「そうだったんですか・・・」

「でも、綾人君こそどうして？」

「はい？」

質問を返してくるなのはに首を傾げる綾人

「綾人君は、なんでヴィヴィオのこと、応援してくれるの？・・・
いくら、スバルやティアナの先輩だって言っても・・・ヴィヴィオ
とは面識も無いのに・・・」

「それは・・・」

なのはの疑問も当然である

ヴィヴィオとどこるか、機動六課との繋がりが全くといってないはずの綾人が『後輩に頼まれたから』という理由だけで行動するのがいまいちよく分からなかった

「確かに、ヴィヴィオちゃんのこととは、スバル達から聞かなきゃ顔も名前も知らないまま、生活してましたね・・・」

「うん・・・」

「スバル達が俺に相談してくれたから、知ることが出来ました・・・」

少し笑いながら顔を上げる綾人

「スバル達も、ハヤトのことが好きなのは、知ってました？」

「うん・・・本人達は必死に否定してたけど」

なのはも頷きながら笑う

当時の光景を思い出している

「そんなあいつらが、ヴィヴィオちゃんとハヤトのことを認めたいんですよ・・・そんなあいつらの覚悟を・・・受け止めてやりたいんですよ・・・あいつらの『先輩』として・・・ね？」

「綾人君……」

「ま、後は……惚れた弱み……ですかね……」

「え？」

綾人の小さい一言を聞き逃したなのは

「なんでもないですよ！ あ、ヴィヴィオちゃん達どうしてますかね？」

「あ、そろそろ迎えに行かなきゃ」

自然を装って話題を変える綾人
なのはも時計を見ながら答える

「それなら、俺も行きますよ」

「え……でも」

さすがに、それまで頼めないとなのはも渋るが

「「女の子の一人歩きは危険だ」ってハヤトを連れて行かせたのに、高町一尉を一人歩きさせてたら、ハヤトに呆れられます。それに俺も、ヴィヴィオちゃんがどんな練習してるのか、見てみたいので……」

「にやはは！ じゃあ、よろしくね？」

綾人の言葉に少し笑いながら、任せることにして二人で玄関に向かう

「あ、そうだ。綾人君？」

「はい？」

扉を開ける瞬間に、何かを思い出し綾人に振り返るなのは

「『高町一尉』なんて、堅苦しい言い方しなくていいよ？　『なのは』ってよんでくれていいからね？」
「あ……はあ……」

突然そう言われて、曖昧に頷くしかない綾人だった……

第5話 とある母娘（おやこ）と夕食を（後書き）

どうも！

なぜか、フラグを構築しそうな綾人君でした

おかしいな・・・ハヤト君とヴィヴィオがメインなのに・・・

ま、立つたとしても成立はありえないので気にしない！！

次回から、綾人君は信念同様「なのはさん」と呼ぶことになります

では、次回予告！

公園にて、レイジングハートにサポートしてもらいつつ、魔法の練習を始めるヴィヴィオ

それは、どこかで見たことのある練習だった・・・

「お兄ちゃん！どうだった？」

「ハズレだな」

次回、「とある少女の練習風景」

今回は、とある伏線を張りたと思います

P.S.

この小説のPVが30000件を突破しました！！

こんなにも早く突破するとは思わず驚いています

記念小説をのんびり考えながら、今後もがんばってまいりますので、
よろしく願います!!

第6話 とある少女の訓練風景（前書き）

さて、第6話ですね

今回は、皆様もきつとよくご存知のあの場面を再現します

第6話 とある少女の訓練風景

高町家を出発したヴィヴィオとハヤトは、直ぐ近くの市民公園内の、公共魔法練習場に来ていた

「さ〜って！ それじゃ、最初はいつもの・・・レイジングハート
」！

「All right.」

ヴィヴィオの呼びかけに答え、結界を張り、ヴィヴィオの足元に魔法陣を展開するレイジングハート

「あ！ お兄ちゃん！」

「ん？」

思い出したように、後ろに立っているハヤトに振り返る

「後ろ向いててー!!」

「へ〜へ〜」

少し顔を紅くしながら言うヴィヴィオ
ハヤトも言われたとおり後ろを向く

「ふう・・・」

小さく息を吐き出し、集中するヴィヴィオ
魔法陣の光が強くなり、ヴィヴィオを包む

光の中で、ヴィヴィオは子供の姿から大人の女性の姿に変わる

黒を基調にしたインナーに、白いジャケットを羽織っている

「ふう・・・よし!」

「もういいか?」

拳を握って頷くと、ハヤトが後ろを向いたまま聞いてくる

「あ、うん! もういいよ!」

ヴィヴィオの許可が出たので、向きなおすハヤト

「ふむ・・・」

「な・・・なに?」

ジッとヴィヴィオのある一点を見つめるハヤト

ヴィヴィオは、顔を赤くしながら聞いてみる

「いや、前々から思ってたけど、意外とデカくなるよな・・・Dく

「ぐはあ!?!」

全て言い終わる前にヴィヴィオに殴り飛ばされる

「お兄ちゃんのエッチ!」

胸を押さえながら怒るヴィヴィオ

「もう・・・えっと、まずは身体強化系と放出制御だね?」

「Yes」

気を取り直してレイジングハートに確認し、構えを取るヴィヴィオ

足元に魔法陣が展開される

「ふっ！・・・はぁ！」

魔法陣の中で、様々な構えをとっていく
突き出す拳は真っ直ぐに、蹴り上げる脚はしなやかに
流れるように型を確認していくヴィヴィオ

「ふん・・・」

そんなヴィヴィオの様子を、起き上がって見つめるハヤト

「ふう・・・」

一通りの型を確認し、深呼吸するヴィヴィオ

「お兄ちゃん！ どうだった？」

「あ・・・ま、いいんじゃない？」

期待するような目でハヤトに聞くが、ハヤトは適当に答える

「むう！ 他に何か無いの！？」

「いや、だって俺、専門家じゃねーから」

「それにしたって、何かあるでしょ！？」「かっこいい！」「とか」「綺麗！」「とか！」

べつやら、何かしらハヤトに褒めて欲しかったらしい

「あ・・・いい感じの乳ゆぐへえ！？」

「エッチー！..！」

またしても言い終わる前に吹き飛ばされる
ヴィヴィオは、思っていた言葉とは程遠い台詞に完全にご立腹なご様子

「次は、射撃制御！ レイジングハート、カウントよろしく！」

「All right」

ヴィヴィオの右手の人差し指に、一発の魔力弾が形成される
そして、左手には来る途中で買った缶ジュースの空き缶が握られていた

「いくよ・・・それ！」

缶を頭上に放り投げる

「デバインシューター・・・シュート!!」

指を缶に向けてシューターを発射する
弾は缶に命中し、飛んでいく

「コントロール！」

ヴィヴィオの合図と共に、シューターが再び缶に向かっていく
そして、下から上へと何度も弾いていく

「18・・・19・・・20・・・21・・・」

レイジングハートがカウントしていく

「アクセル……！」

シューターの速度が上がり、さらに缶を打ち上げる

ハ67・・・68・・・69・・・70・・・71・・・

「くう……！！！」

ヴィヴィオの顔が少しずつ苦しそうになる

ハ99・・・100・・・

遂に、カウントが100に到達する

「ふう……」

一息つき、缶を見上げるヴィヴィオ
そして……

「ラスト……！」

掛け声と共に腕を振り下ろし、自分の腰の位置辺りに落ちてきた缶に弾を当てて先にあるゴミ箱に向かわせる
しかし、缶はゴミ箱のへりに当たってしまい、弾かれる

「ハズレだな」

「ああ……」

入らなかったのがショックだったのか、落ち込んでしまっヴィヴィオ

「むう……もう少しだったのに……！！！」

「そんな簡単に出来ね〜って」

悔しさで、地団駄を踏むヴィヴィオを諭すハヤト

「よい出来です〜」

「えへへ・・・ありがとう！」

レイジングハートに礼を言いながら缶を拾い、改めてゴミ箱に捨てる

「今の、採点すると何点くらい？」

「約80点です〜」

なかなかの高得点である

「ヴィヴィオ〜！」

遠くから、ヴィヴィオを呼ぶ声がする

「あ！なのはママ！〜！」

「天童先輩も」

振り向くと、手を上げながら近付いてくるのはと綾人

「へ〜。これがヴィヴィオちゃんの「大人モード」ですか？」

「うん！ そうだよ」

来る途中、なのはからヴィヴィオの変身魔法について聞いていた綾人はなのはに確認する

「なるほど・・・ヴィヴィオちゃんが大きくなったらこうなるわけか・・・」

「えへへ！」

「もともと可愛いから、大きくなっても美人だな？」

「あ、ありがとうございます！！」

とつてもナチュラルに褒める綾人

「調子はどうだい？」

「あゝ・・・まあまあです」

綾人の質問に、苦笑いしながら答えるヴィヴィオ

「そつか・・・ヴィヴィオちゃん？」

「はい？」

「ちよつと打つてみて？」

そう言つて、右手を開いて前に出す綾人

「は、はい！」

ヴィヴィオも慌てて構え、手のひらに向かって拳を突き出す
向かってきた拳を軽く受け止める綾人

「ふむ・・・なるほどね・・・筋はいいな」

「え？」

「基礎だけとは言え、スバルが教えただけはある・・・真っ直ぐな拳だ」

ニヤリと笑う綾人

「これでも、俺の母方の実家って道場やってたからな・・・それぐらいならわかる」

「そうなんですか・・・」

「ヴィヴィオちゃんは、これからもっと強くなれるよ・・・保障しよう」

笑いながらヴィヴィオにそう告げる綾人

「あ、ありがとうございますー!!」

ヴィヴィオも思い切り頭を下げる

「でも・・・そうだな・・・」

「?」

急に何か考えだす綾人

「ヴィヴィオちゃん。今度の土曜日は空いてるかな?」

「あ・・・はい。学校があるので、お昼からなら・・・」

よく分からないまま、答えるヴィヴィオ

「それじゃあ、この間のジムに来てくれるかな?」

「はあ・・・えっと・・・?」

まだよく分からない顔のヴィヴィオ

「俺と、スパーをしてみないか?」

「え・・・えええ!?!」

綾人の提案に声を挙げるヴィヴィオ

「あ、綾人さんと!？」

「ああ。実際に打ち合ってみたいしな・・・どう？」

「で・・・でも・・・」

どうしようか迷っているヴィヴィオだが

「よ、よろしくお願いします!」

「ああ」

緊張しながら頭を下げた

「さて、そろそろ戻ろうか? だいぶいい時間だ」

「そうだね」

綾人の言葉に頷き、一度高町家に戻る一行

高町家・玄関

「それじゃあね? ハヤト君、綾人君!」

「ご馳走さまです!」

「ごちそうさまです。ヴィヴィオちゃん、また土曜日にな?」

「はい!」

それぞれに挨拶を済ませて、家を後にする綾人とハヤト

【綾人SIDE】

「そんじゃ、先輩。荷物どうもっス！」

「ああ」

綾人の家で荷物を回収し、挨拶を済ませ帰って入ったハヤト

「さて……」

見送った後、ある人物に通信を入れる綾人

「よお！ 今、大丈夫か？……。。。。。。ああ。で、今度の土曜日なんだけど……。。。。。。よし、それじゃ、待ってるからな？……おやすみ」

通信を終えると、ベッドに横たわる綾人

「さて……今度の土曜日が楽しみだな……」

それだけ言うと、目を閉じて眠りに付く綾人だった……

第6話 とある少女の訓練風景（後書き）

どうも！

十三年前のなのはさんとまったく同じ訓練をするヴィヴィオ

結果と点数まで一緒・・・さすがは親子！

さて、またしても伏線を張る綾人君でした

では、次回予告

綾人との約束から四日後、コロナとともに無限書庫に来ていたヴィヴィオ

そこで、新たな出会いをする・・・

「あれ？・・・確か、A組の高町さん？」

「うん！他にも色々やってるんだ！」

次回、「とある少女の新たな出会い」

今回は、ヴィヴィオ中心のお話です！

ところで、綾人君にフラグは必要でしょうか？

このお話は、ハヤト君とヴィヴィオの恋を応援するものなのに、なぜか綾人君がフラグを立てることがたまに見られてしまいます・・・

まあ、立てるだけ立てて、全部へし折るのも構わないんですが・・・

それはそうと、もうすぐこの小説のPVが50000件に届きそうです

それにより、20000件では見送った記念小説をやるつもりです
内容としては、綾人君とハヤト君達との出会いの物語にしようかと

やはり、一番最初の出会いは重要かとも思っています、これにしました

ラモン先生には、前に相談したときに「ハヤト君とヴィヴィオ関係
がいいかも」と言われましたが、それなら、本編で十分出来るので
は?と思いましたが・・・

ラモン先生、わざわざ相談に乗っていただいたのに申し訳ありません

まあ、この次の記念小説では、それにしようかなとは思いますが、
今回はこれで行きます

タイトルは「一応」とある新人とのファーストコンタクト」と予定し
てます

現在私の脳内では、なぜか2、3話位の長さになりそうなんです
が、

第7話 とある少女の新たな出会い（前書き）

間違えて消してしまつて大幅に遅れてしまつた・・・

それと、もう一つ・・・ごめんなさい！

と、なにがごめんなさいなのかを告げずに本編をどうぞ！

第7話 とある少女の新たな出会い

無限書庫にて・・・

「コロナ〜！ これでいいの〜？」

手に持った本を持って、コロナのもとに向かうヴィヴィオ

「え〜つと・・・うん！ ありがとう、ヴィヴィオ！」

「うん！」

渡された本を確認し、お礼を言うコロナに笑顔で答えるヴィヴィオ

「あ、ヴィヴィオ。ここにいたんだ？」

「あ、ユーノ先生！ こんにちは！」

「こんにちは！」

本棚からひよっこり顔を出したのは、無限書庫の司書長で、なのはやフェイトの十年来の幼馴染である『ユーノ・スクライア』である

ヴィヴィオが無限書庫の司書資格を取るために勉強を見てあげたり、彼女に検索魔法を教えたのも彼である

ヴィヴィオ曰く

「ユーノ先生の教え方は、とっても丁寧で分かりやすい！」

とのこと・・・

「はい、こんにちは。二人とも、もうすぐ休憩にしたら？」
「あ……もう四時なんだ……」

ヴィヴィオが携帯で時間を確認する

「紅茶入れたから、飲んでいつて？」

「あ、はい！」

「いただきます！」

そう答え、ユーノと一緒に司書達の休憩所に入るヴィヴィオとコロナ

「はい。どうぞー！」

「はい！」

ユーノからカップを受け取り、紅茶を飲む二人

「美味しいです！」

「そう。知り合いから貰った茶葉なんだけど……喜んでもらって
なによりだよ」

コロナの感想に、笑顔で答えるユーノ

「どう？ 探してた本は見つかった？」

「はい！ ヴィヴィオのおかげで早く見つかりました！」

「えへへ！」

「そう……」

本を見せながら報告するコロナ

横ではヴィヴィオが頭を掻いて照れている

「このあとは、いつもの?」

「はい! 探検です!」

「そう・・・あまり遅くならないでね? あんまり遅いと、なのは達が心配するから・・・」

「はい!」

ユーノに返事を返して、無限書庫の探検を始めるヴィヴィオとコロナ

二人のこの光景は、無限書庫でも小さな話題になっている

「それじゃ、今日は・・・ひゃう!」

「あう!」

本棚を曲がったところで、誰かとぶつかって尻餅を付くヴィヴィオ

「ヴィヴィオ!? 大丈夫?」

「う・・・うん・・・」

「いたた・・・」

駆け寄るコロナに答えるヴィヴィオ

相手も頭をさすっている

「あ!、ごめんなさい!」

「ううん・・・ごつちこそ・・・あれ? 確か、A組の高町さん?」

「え?・・・えっと・・・」

顔を見ながらクラスと名前を聞かれるヴィヴィオだが、相手の名前がわからないヴィヴィオ

「あ、あたし、B組の『リオ・ウエズリー』って言います! よろ

しくね!」

それに気づいて自己紹介する少女『リオ』

「あ……た、高町ヴィヴィオです!」

「コロナ・ティミルです」

二人も自己紹介を返す

「そっか……ヴィヴィオもストライクアーツやってるんだ?」

「うん! リオもなんだね!」

数分後、リオも加えて無限書庫の探検を再開したヴィヴィオ達

この数分で、互いに名前で呼び会えるほど仲良くなった

この辺も、母親とよく似ている

「まあね〜! っっていうても、ウチの実家の流派の格闘術も使うんだけどね?」

「へ……」

「それに、最近では『師匠』に稽古付けてもらってるし!」

「『師匠?』」

不意にリオが発した単語に首を傾げるヴィヴィオとコロナ

「うん! この間一人で練習してたときに、色々教えてくれて、それ以来、たまに稽古付けてもらってるんだ〜!」

「そうなんだ……」

状況的にナンパなのではないかと思ったヴィヴィオとコロナ

下手をすれば、その師匠はロリコンなのかもしれない・・・

「それに、師匠って強くって、格好いいんだ〜!!」

目を輝かせながらそういうリオ

「ふ〜ん・・・」

ヴィヴィオは、その師匠の顔がわからないため、そう答えるしかない

「ヴィヴィオのお兄さんも格好いいよね？」

「あ、うん!!」

コロナの言葉に、大きく頷くヴィヴィオ

「へ〜・・・どんな人〜？」

「この人だよ!!」

そう言つて、リオに生徒証に入ったハヤトの写真を突きつける

「う〜ん・・・確かに格好いいけど、やっぱり師匠の方が格好いい

よ!!」

「む!　じゃあ、そのお師匠さんの写真見せてよ!!」

ムキになりながらリオにそう要求するヴィヴィオ

「いいよ〜・・・はい!　この人があたしの師匠!!」

リオもポケットから写真を取り出してヴィヴィオ達に見せる

「わ〜！ 確かに格好いいね〜」

「でしよ〜・・・って、ヴィヴィオ？ どうしたの？」

写真を見て、コロナの素直な感想にご満悦なりオ

そして、写真を見て黙ってしまったヴィヴィオに声をかける

「この人・・・綾人さん！？」

「え！？ なんで師匠の名前知ってるの！？」

写真の人物の名前をズバリ言い当てたヴィヴィオにリオも声を上げる

「ヴィヴィオ〜？ もう少し、声のトーン落としてね〜？」

「す、すみません・・・」

注意しに現れたユーノに頭を下げて謝るヴィヴィオとリオ

「で・・・どうして、師匠の名前を？」

「ハヤトお兄ちゃんの・・・先輩なんだ・・・」

「『ハヤトお兄ちゃん』って？」

「この人・・・」

再び写真を見せる

「へ〜・・・変な偶然〜」

これが綾人マジック

知らない所で人を繋げる、もはや彼の固有スキル

「あ、もしかして師匠が言ってた“土曜日に紹介したい子”ってヴィヴィオ？」

「あ……多分……土曜日に組み手の約束してるし……」

リオが先日の綾人からの電話の内容を思い出しヴィヴィオに聞くと、ヴィヴィオも頷く

「へ……師匠と組み手ね……」

どこか遠い目をしているリオ

ちなみに、『師匠』という呼び名は、彼女が勝手に言っているもので、決して綾人が言わせているのではない

「綾人さんって強いの？」

そこに、空気になりつつあったコロナが不意に質問する

「すごく強いよ？ 多分、そんじょそこらの人には負けないんじゃないかな？」

「へ……」

リオの言葉に感心するヴィヴィオとコロナ

若干リオの主観も含まれているが……

「考えてみたら、師匠の“全力”って見たこと無いな」

「そうなの？」

「うん。前に“全力でやってください！！”って言ったら……なら、させてみな？”って軽くあしらわれちゃった……」

何度かの稽古で組み手もしているリオだが、綾人は未だに全力で相手はしていない

誤解しないでもらいたいのだが、綾人は決して手を抜いているわけではない

組み手も稽古も真剣に取り組み、リオのレベルアップを図っているだが、それでも全力でやると、リオの体にも綾人自身にも負荷がかかるので力を抑えなければならない

それをリオにはしっかりと教えているが、リオとしては本気の実力を知りたいのだ

「だから、ヴィヴィオもあつという間に負けちゃうかもね？」

「む！ そんなことないよ！ 確かに勝てないかもしれないけど・・・わたしだって、毎日練習してるんだもん！！」

リオの軽い挑発に乗ってしまうヴィヴィオ

綾人の実力はリオだけでなくハヤトからもある程度聞いている

管理局でもかなりの実力を持つ魔導師の息子であり、ハヤト、スバル、ティアナの三人を同時に相手して、なおかつ勝利してみせるほどである・・・と

「よっっし・・・明日は一日練習だよ！！」

そう言って、綾人との組み手に俄然やる気を見せるヴィヴィオだが・

・

「ヴィヴィオ〜？」
「「「あ．．．」「」」

ここが、無限書庫であることをすっかり忘れていたのであった．．．

【綾人SIDE】

ところ変わって、陸士225隊・大型演習場にて．．．

「よし！　そこまで！！」

「「「お．．．お疲れ様です．．．」「」」「お疲れ様です！」

笛の音と共にヘタリ込む四人と元気に返す声が一人．．．

「お疲れ．．．だいぶ慣れてきたかな？」

「まあ．．．ちよつとは．．．」

「あたしは．．．まだ無理っス．．．」

「へっ！　あ、あたしは慣れたね！！」

「私もだ．．．」

近づいてくる青年．．．綾人が聞くと
へばっていた四人がそれぞれ答える

「ギンガはどうだ？」

「私は、まだいけるかな？」

そして、四人の横で普通にしている

ギンガ・ナカジマ．．．陸士108隊の捜査官で、スバルの姉．．．

そしてハヤトの（本人曰く）永遠のライバルでもある・・・

「さすがは“脳筋”・・・鍛え方が常人とは違うな・・・」

「何か言った？」

「いや・・・それに、ノーヴェにチンク？ 無理はしなくてもいいぞ？」

ポツリと呟く綾人に詰め寄ろうとするギンガだが、綾人はさっさと話題を変えてしまう

「「うっ！！！」」

綾人の一言に肩をビクツと震わせる二人・・・

チンク・ナカジマ・・・背が低く、右目に眼帯を付けている陸士108隊の特別チーム『N2R』のリーダーで、スバルやギンガとは家族であり、次女

もう一人はノーヴェ・ナカジマ・・・同じく『N2R』のメンバーで、ナカジマ家の五女・・・容姿はスバルと瓜二つである

「そうっすよ、ノーヴェ？ 無理はダメっすよ？」

「チンク姉も・・・結構きついんじゃない？」

「うっせーよ、ウエンディ！！！」

「そうだぞ・・・姉はきつくなどないぞ？ ディエチ・・・」

その横で二人に声をかけるもう二人

ウエンディ・ナカジマ・・・マゼンダ色の髪を首元で留めているナカジマ家の六女

デイエチ・ナカジマ・・・栗色の長髪を首で結っていて、物静かな雰囲気を出しているナカジマ家の三女

チンク・ノーヴェ・ウエンディ・デイエチの四人は、三年前の『J S 事件』の際、機動六課と戦った戦闘機人であり、事件終了後に108 隊の『ゲンヤ・ナカジマ』に引き取られた

彼女達『N2R』が、なぜ綾人のいる225 隊にいるのか

それは、彼女達に様々な部隊で経験を積ませたいというゲンヤの提案である

陸士部隊のうちいくつかに赴く予定で、最初に赴いたのがこの225 隊である

綾人は、そんな彼女達の訓練指導を任されている

「まあ・・・ここでの訓練で大丈夫なら、ほとんどの部隊でも大丈夫じゃないかな？」

「そうなんですか？」

「ああ。ウチより厳しいところはそうはないだろうな・・・多分、101 ぐらいか？」

首を傾げるデイエチにそう教える綾人

「101 って・・・確か・・・」

「ハヤトのお姉さんがいる部隊っスね？」

部隊名でどこか思い出しているノーヴェとウエンディ

「ああ。君等は会ったことあるんだっけ？ 『ハヅキ・ロツクウエル』三等陸佐に……」

「はい……海上隔離施設にいたときに……何度か……」

綾人がある局員の名前を出して聞くと、チンクが少し遠い目をして答える

ハヅキ・ロツクウエル……陸士1001隊の三等陸佐でハヤトの姉である（ただし、『超』が付くほどのブラコンである）

三年前の『JS事件』の時は一等陸尉だったが、この三年で1001の部隊長が引退し繰り上げで部隊長になり階級も三等陸佐になった

綾人は、ハヤトから話は聞いているが、直接の面識はまだない

「まあ、それはおいといて……今日はもう終わりだし、明日乗り切ったら土曜は休みだからな？」

「……はい！」「」「」

綾人の言葉に嬉しそうに答える四人

「綾人君も、土曜日はお休みなの？」

ギンガがふと聞いてくる

「ああ。ついでに約束もある……」

「約束って？」

ノーヴェも話に入ってくる

「ヴィヴィオちゃんと組み手をな？」
「ヴィヴィオと!？」

綾人の約束の内容に驚くノーヴェ

ちなみに

綾人がハヤト達の先輩であることや、ヴィヴィオのことなどは最初に出会ったときに話をしている

そのため、綾人はチンクヤノーヴェ達のある意味特殊な事情も知っている

「まあ、いろいろあってな・・・それに、紹介したい子もいるし・・・」

「そうなの？」

「ああ。その子とも最近知り合ってた・・・その子もストライクアーツ・・・っていうか格闘技やってて、たまに稽古も見てやってるし、ヴィヴィオちゃんと友達になれればな・・・と」

「……………へ……………」

綾人の簡単な説明に驚くばかりのギンガ達

だが、綾人はその紹介したい子であるリオとヴィヴィオが、すでに会って友達になっていることなど知りもしないで、土曜日を楽しみにしているのだった・・・

第7話 とある少女の新たな出会い（後書き）

どうも！！

という訳で、三人娘の最後の一人、リオが登場です！

新キャラを期待していた方々・・・もう一回、すみませんでした！！

今回も、たくさんキャラをだしたな・・・

おそらく「とあ新」でもそんなに出てきていないユーノ先生とか、名前だけでもハツキさんとか・・・

あとノーヴェ達ですね・・・これで、一通りの原作キャラは出したかな・・・？

あ、まだはやてさん達「八神家」とエリキャラ、ルールーなんかが残ってるか・・・

綾人君に追加設定してしまった・・・

さて・・・こんな感じで次回予告を・・・

ついに約束の日・・・

自身の持てる力を出し切り、綾人に挑むヴィヴィオ・・・

「全力で来るといい」

「はい！！！！」

次回、「とある少女の挑戦！」

今回は、いよいよ綾人君とヴィヴィオの組み手です

そして、次回を投稿したら、記念小説を準備しようと思います

第8話 とある少女の挑戦！（前書き）

こちらにも一回目の投稿です！！

ついに、綾人君とヴィヴィオが直接対決！！

第8話 とある少女の挑戦!

首都クラナガン・スポーツジム前にて・・・

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「う・・・うん！」

心配そうに声をかけるコロナに、緊張しながら答えるヴィヴィオと、そこに

「ヴィヴィオ！」

「あれ？ スバルさん・・・それに・・・」

声のする方を見ると、手を上げながら近づくスバルとあと二人

「ほらっ！ ちゃっちゃと歩く!!！」

「わったから、引っ張んなって!!！」

「ティアナさんに、お兄ちゃん!？」

ティアナと、そのティアナに首元を引っ張られながら歩いてくるハヤトがいた

「おっす。ヴィヴィオ、あとコロナも」

「はい！ お兄さん!!！」

「なんでスバルさん達が？」

挨拶してるハヤトとコロナを尻目に、ここにいる理由を聞いてみる
ヴィヴィオ

「ノーヴェから聞いたのよ。今日、先輩と組み手するって」
「あたしは、ギン姉からね」
「ノーヴェとギンガさんから？」

ヴィヴィオに答えるティアナとスバル

「ちょうど、お休みだし。ヴィヴィオの応援にね？」
「そうなんですか・・・お、お兄ちゃんも？」

そう言つて、ハヤトに視線を向けるヴィヴィオ

「ん？ まあな」
「そうなんだ・・・」

ぶつきらぼうに答えるハヤトに少し嬉しそうな顔になるヴィヴィオ

「お？ 待たせたかな？」
「あ・・・綾人さん！！」

後ろからすつかり聞きなれた声が聞こえ振り向くと、綾人が近づいてきていた

「今日は悪いね？ せつかくの土曜日なのに・・・」
「いえ！ こちらこそ、今日はよろしくお願いします！！」

謝る綾人に、そう言つて頭を下げるヴィヴィオ

「あ・・・はじめまして！」
「ん？」

ヴィヴィオの横から声をかけるコロナ

「コロナ・ティミルです！ ヴィヴィオとは、一年生のころからのお友達です！！」

「そうか・・・はじめまして、天童綾人だ。よろしくね」
「はい！」

互いに自己紹介をすませる綾人とコロナ

「で・・・なんでスバルやティアナがいるんだ？」

「ノーヴェやウエンディに聞きました・・・」

「あたしはギン姉から・・・」

「ふん・・・ま、いいか・・・」

別段気にすることでもないのでスルーする綾人だが

<スバル、ティアナ・・・>

<<はい？>>

念話で二人に呼びかける

<後で、ちょっと話がある>

<話・・・ですか？>

<ああ・・・ハヤトのことだな>

<<!!!!>>

綾人の言葉に二人が目を見開く

<わかりました・・・>

<はい・・・>

二人も真剣な顔で頷く

「それじゃ、さっさと行きましょかね」

「ああ、ちよつと待ってくれ？ 多分もつすぐ・・・」

そう言つて、周りを見渡す綾人

「師匠！！」

「お？」

綾人の後ろから声が聞こえ、走る音が近づいてくる

「おまたせしました！」

「ああ。時間ピッタリだな？・・・それと『師匠』はやめてくれ・・・
・リオ

「嫌です！！」

綾人の頼みをきっぱりと拒否するリオ

この返答は予想できていたため、綾人も若干諦めている

「あ、リオ！」

「さっきぶり〜」

「ヴィヴィオ！ コロナ！！」

そして、ヴィヴィオとコロナにも声をかける

「あれ？ リオ・・・二人と知り合いなのか？」

「あ、はい！ ついこの間、友達になりました！」

「そうか・・・なんだ・・・」

今日紹介しようと思っていたが、すでに友達になっていてちょっと残念な綾人

「まあ、いいか・・・さて、全員揃ったし、行くか・・・」

綾人の言葉で、全員スポーツジムに入っていた

それぞれ更衣室で着替える

先に着替え終わったヴィヴィオは、アリーナで準備運動をしていた

「ヴィヴィオ、自信は？」

「うん・・・どうかな・・・」

コロナの質問にも首をひねるヴィヴィオ

「おまたせ・・・」

「あ・・・」

着替えた綾人がゆっくりと入ってくる
全身真っ黒の服装である

「やった！先輩やつぱ黒だ・・・」

「くそ！負けた!!」

外野のスバルとハヤトが何か言っている

どうやら、綾人の服装で賭けをしていたようだ（報酬はアイス）

「準備はいいかな？」

「はい!!！」

そんな二人のことは放っておいて、ヴィヴィオと向き合う綾人

「すみません。ここ、使います・・・」

ほかの練習者に声をかけ、アリーナに入る綾人とヴィヴィオ
そして、距離をあけて向かい合う

「ヴィヴィオちゃん・・・遠慮せずに全力で来るといい」

「はい!!！ 行きます!!！」

綾人は右手を腰にすえて左手を前で構え
ヴィヴィオは両手を顔のそばで構える（所謂、ファイティングポーズ）

（変わった構えだな・・・）

綾人の構えにそう思ったヴィヴィオ

「さあ・・・来い！」

「はい!!！」

綾人の言葉を合図に突っ込むヴィヴィオ

「やあ!!！」

トップスピードで綾人との距離を詰め、右のストレートを放つ

「ふっ」

しかし、綾人は軽く弾く

「はっ！ やあ！」

ヴィヴィオはひるむことなく攻撃を続けるが、綾人はその全てを捌いていった・・・それも左手一本で

数秒間攻撃を続けていたヴィヴィオだが、呼吸を整えるため、一度綾人と距離をとった

(ぜ・・・全部捌かれた・・・)

フェイントを織り交ぜながらの攻撃も、すべて完璧に捌ききった綾人に、ヴィヴィオも驚くしかない

【見学者SIDE】

「ほえ・・・すごいね」

「でしょ？ しかも、あれでまだまだ全力じゃないんだよ？」

「確かに・・・」

「前は、もっとすごかったしね・・・」

綾人の動きに驚くコロナにどこか自慢げに言うリオ

そして、久しぶりを見る綾人の戦闘と、過去の自分達との模擬戦を思い出しているスバルとティアナ

「お？ 次は先輩が動くのか？」

ハヤトの言葉に、全員が注目する

【綾人SIDE】

「さすがだな・・・攻撃のキレはいいし、威力も申し分ない・・・」

ヴィヴィオの攻撃を受けながら分析していた綾人

「さて・・・それじゃ、今度はこちらから行くよ？」

「!!!」

綾人の言葉に、慌てて両手をクロスさせ防御の態勢になるヴィヴィオ

「はっ!!!」

ヴィヴィオの手の交差した点を正確に打ち抜く綾人の掌てい

「あっ!?!」

防御態勢のまま、後ろに飛ばされるヴィヴィオ

足をすりながら、なんとか停止する

「へえ・・・止めたか・・・」

右手を突き出したまま、感心する綾人

ヴィヴィオは、止まったまま動かない

「どうした？ もう終わりかい？」

綾人の呼びかけにも答えない

しばらく経った後、パツと顔を上げるヴィヴィオ
すると、ものすごい笑顔だった

(・・・すごい・・・すごい！・・・すごい！)

綾人の攻撃を受け、そう思ったヴィヴィオ

「綾人さん！ 行きます！！」

「ああ！」

改めて構え直すヴィヴィオに答える綾人

「やああああ！！」

再びトップスピードで突っ込んでいくヴィヴィオ
そして、もう一度右ストレートを放つ
綾人も弾く構えを取るが

「はあ！！」

「！？」

はじかずに顔を反らして回避する

【見学者SIDE】

「攻撃を……」

「回避した？」

今まで完璧に攻撃を“弾いて”いた綾人が、初めて“回避した”こと
に、見学者全員が驚く

「なんで？」

「ヴィヴィオの攻撃は……さっきと同じなのに……」
「こりゃ、面白いかもな」

スバルもティアナもハヤトも気付かなかった
ヴィヴィオの攻撃の変化に

【綾人SIDE】

（驚いた……攻撃が“加速”した……？）

綾人自身も驚いていた

ヴィヴィオの攻撃が、寸前で速度を上げて来たのだ

（この子は……未恐ろしいな……まったく……）

思わず苦笑いする

（それなら……俺も……）

あることを決め、一度構えを解く綾人
ヴィヴィオも不思議に思いながら見つめている

「ヴィヴィオちゃん……一つ謝ろう……」

「え？」

「すこし……舐めてた……君の実力を……君の伸びしろをね」

小さく笑いながら、そういう綾人

「だから……お詫びについてはなんだけど……少しだけ、“本気”でやるっ」

「!?!」

綾人の一言に、場の空気が変わる

改めて構えを取り直す綾人
そして、その構えに驚く

「左右……逆……?」

先程までは“左手を前に出し、右手を腰に据えて”いた綾人だったが
現在は“右手を前に出し、左手を腰に据えて”いた……

「思い出してみな？ 俺の“利き腕”を……」

「あ!?!」

ヴィヴィオは思い出し声を上げる

それは、先日一緒に夕食を食べたとき……
綾人は、スプーンを“左手”で持っていたのだ

「俺は・・・“左利き”・・・だよ？」

綾人は不敵に笑った・・・

第8話 とある少女の挑戦！（後書き）

どうも

前半戦終了です！

綾人君は、「信念」でもこちらでも左利きです

では、次回予告！

ヴィヴィオの実力を認め、少しだけ本気を出すことにした綾人
そして、ヴィヴィオにある言葉を伝える・・・

「その思いを・・・拳に乗せてみな？」

「思いを？」

「ああ。自分の信じる思い・・・“信念”をな・・・」

次回、「とある陸曹長の評価」

次回からは、綾人君が少しだけ本気になります

第9話 とある陸曹長の評価（前書き）

なんとか投稿できました・・・

今回は、綾人君とヴィヴィオの組み手後編です

第9話 とある陸曹長の評価

構え直した綾人がまっすぐにヴィヴィオを見つめる

「さあ・・・行くよ？」

「!?!」

言つと同時にヴィヴィオと距離を詰める綾人

(チャージ突撃!?)

「ふっ!」

「わわ!?!」

繰り出された掌ていを間一髪で横に回避し、距離を取るヴィヴィオ

(さっきよりも早い!)

「まだだ!?!」

驚いていると、綾人が再び突っ込んでくる

「せい!」

「くっ!?!」

回避しきれないと悟ったヴィヴィオは、腕をクロスさせて防御する
綾人は、そこに向かってまっすぐに掌ていを打ち込む

「くう!?!」

衝撃がヴィヴィオを襲う

(防御の上から・・・衝撃がすごい・・・!)

あまりの衝撃で腕が少し痺れてしまっているヴィヴィオ

【見学者SIDE】

「 凄い・・・ 」

「 うん・・・あんな師匠初めて・・・ 」

綾人の猛攻を見て、コロナとリオがそれぞれの感想を言う

「 容赦ないね・・・ 」

「 先輩だからね・・・ 」

スバルとティアナも、心配そうに見つめる

「 ヴィヴィオ! 」

その横で、観戦していたハヤトがヴィヴィオに声をかける

【綾人SIDE】

「 頑張れっつて! お前、この間20人抜きしたんだろ? 」

「 お兄ちゃん・・・ 」

ハヤトの言葉に、驚いているヴィヴィオ

「 先輩に勝てなくても、お前が弱いわけじゃねえんだ。それに、少

しでも先輩に本気出させたんだぞ？ 自信持って、思いっきりやり
ちまえ！！」

「あ……」

そこで、ヴィヴィオも気づいた

確かに綾人にほんの少しでも本気を出させた……

それは、綾人の（自称）弟子のリオでもまだ出来ていないことだと

そして、綾人の出す気迫に押され、自信をなくしかけていたと……

「まさか、ハヤトに言われるなんてな……まあ、いいか……ヴィ
ヴィオちゃん？」

「あ……はい」

「君は……どうしてストライクアーツをやっているんだ？」

「それは……」

ヴィヴィオがストライクアーツを始めたきっかけ……

それは、小さい頃、強さと優しさを教えてくれた優しい母との約束

“強くなる”

それは、物理的にだけでなく、精神的にも

そして、いつか自分が助けられたように、母のことも守ってあげたい

そんな思いを持ってスバルに頼み基礎を学んだ

そして、ノーヴェから指導も受けて、ジムに通って練習もしている

そんなヴィヴィオの思いを悟った綾人はフツと笑い、話しかける

「その思いを・・・拳に乗せてみな？」

「思いを？」

「ああ。自分の信じる思い・・・“信念”をな・・・」

綾人の言葉に、目を閉じて構え直すヴィヴィオ

(・・・わたしの信じる思い・・・なのはママ・・・フェイト
ママ・・・)

ヴィヴィオの脳裏に二人の顔が浮かんでくる

(それに・・・)

目を開き、まっすぐに綾人を見つめるヴィヴィオ

「行きます!!」

「ああ・・・来い・・・ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの目を見て、綾人も少し笑って構える
互いに向き合う

「はあああっ!!」

まっすぐに綾人につっ込んでいくヴィヴィオ

「やあ!!」

「ぶっ!!」

ヴィヴィオの右ストレートを綾人は左手で受け止める

「せい！」

「はっ！」

受け止められたまま、左足を振り上げるヴィヴィオ
綾人もそれに対応して右腕を出して止める

「はあ！！！」

「っ！！！」

そして、ヴィヴィオは止められた足に力を込めて身体を曲げ、その
反動で綾人の顔面に拳をぶつけた

【見学者SIDE】

「「入った！？」」

リオとコロナが同時にそう言つと

「違う・・・入ってないよ・・・」

スバルが冷静に教える

「そうね・・・止められたわ」

「残念ながら」

ティアナとハヤトも言う

リオとコロナは改めて綾人の方を見ると

綾人は、ヴィヴィオの拳を寸前で受け止めていた……

【綾人SIDE】

「いい攻撃だ……ヴィヴィオ」

「あ……」

左手で受け止めながら、ヴィヴィオに話しかける綾人

「その思いをずっと持ち続けな？ 自分の信じる思いを、貫き通すんだ……」

“それが、君を強くする……”

その言葉を聞いたと同時に、ヴィヴィオの腹部に綾人の掌ていが入った……

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「うん……」

試合後、コロナやスバル達に介抱されているヴィヴィオ

「相変わらず容赦ないっスね……」

「それだけ、ヴィヴィオちゃんには伸びしろがあるってことだ……負けを経験して、そのあと成長するか、立ち止まるかは、あの子次第」

第だけどな」

少し離れたところでハヤトとそんな会話をしている綾人

「それに、ヴィヴィオちゃんが元気になったのは、お前のおかげだろうしな？」

「まあ、思ったことを言っただけっスよ？」

「それだけでも、あの子には十分だったんだよ」

「そうっスかね？」

綾人の言葉に、そう言って首を傾げるハヤト

「う・・・ん？」

「あ、ヴィヴィオ！ 大丈夫？」

「コロナ・・・うん」

目を覚ますヴィヴィオ

ゆっくりと起き上がる

「もう大丈夫かな？」

「はい・・・」

目が覚めたのを確認した綾人がそばに来る

「ヴィヴィオちゃん？」

「はい」

「どんな気分だ？」

「あ・・・」

綾人からの質問に、少しうつむく

「・・・悔しいです・・・」

「そうか・・・」

「でも・・・嬉しかったです」

「嬉しい？」

ヴィヴィオから出てきた言葉に首を傾げる綾人

「ほんの少しでも本気を出してもらえて・・・認められた気がして・・・」

立ち上がって綾人を見つめるヴィヴィオ

「あの・・・綾人さん・・・」

「なにかな？」

「どうも、ありがとうございました!!」

そう言って、頭を下げる

「ああ・・・こちらこそな？」

「はい!!」

二人で笑い合う

「それじゃ早速、今の組み手から学ぶ勉強会な？」

「「え？」」

綾人の言葉に首を傾げるヴィヴィオとコロナ

後ろではリオやハヤト達は「やっぱりか」という顔で苦笑いをしていた

そのままヴィヴィオを座らせ、話を始める綾人

「まず、一撃がとても速く精密で、威力もある。それに、相手の動きをしつかりと見ている。俺の攻撃にも徐々に反応が良くなってきたしな？」

先ほどの組み手でしつかりと分析している綾人

「だが、やっぱりと言うか、防御が少し薄いな・・・まあ、これは徐々に身体が出来てきて何とでもなるし・・・その分、逆に速度は十分だから、そこを活かしていくといいかもな」
「具体的にはどうしたらいいですか？」

綾人の話を真剣に聞いて、質問するヴィヴィオ

「道としては二つだな・・・まず、相手に攻撃の隙を与えないほどの速度で一気に攻める『突撃型』チャージタイプ。もう一つは、相手の攻撃を回避、若しくは防御しながら、相手の隙について攻撃を入れる『反撃型』カウンタータイプだな」

速度を“攻め”か“受け”のどちらかに活かすための道

「“攻め”か“受け”か・・・ですか・・・」

「両立はさすがに厳しいから、どちらかに専念したほうがいいな・・・」

綾人の説明に考え込むヴィヴィオ

「まあ、今すぐ決める必要もない。ノーヴェ先生と考えてみるとい

いら」

「はい。そうします!」

そう言っつて、ヴィヴィオは頷く

「それじゃ、今回はここまでだな・・・お疲れ様」

「はい! ありがとうございます!」

こうして、綾人の反省会兼進路相談は終了した・・・

「さてつと・・・このあとはどうすよ?」

時計を確認しながら聞いてくるハヤト

時刻は午後三時

「このまま解散つても、つまんないですし」

「それなら、このまま街に出るか?」

考えながら言うコロナに、綾人の何気なく発したこの一言・・・
後に、後悔することになる・・・（主に綾人とハヤトが）

第9話 とある陸曹長の評価（後書き）

どうも！

組み手と、綾人君による進路相談でした

ヴィヴィオの将来の戦闘スタイルを示すのを目的にしてみました

あ、あと『信念』って言葉をどこかで使いたかったです

ハヤト君が少しかっこよく見え・・・ればいいんですけどね・・・

さて、それじゃ次回予告を・・・

綾人のはなつた一言

それは（主に綾人の）予期せぬ方向へ・・・

「よし・・・ティアナ、勝負だ！ あの時の雪辱、今こそ晴らしてやる！！」

「忘れたわよ。三年も前じゃない・・・」

「普通忘れるよな？」

次回、「とある男女のグループデート」

今回は、少しだけ物語が動くかも？

第10話 とある男女のグループデート（前書き）

ようやくの更新・・・お待たせしました！

今回は少しだけ長いかもです

第10話 とある男女のグループデート

首都クラナガン・ショッピングモール内のとある店にて・・・

「・・・・・・・・先輩？」

「悪い・・・」

ジト目で見えてくるハヤトに、即座に謝る綾人
その後ろから・・・

「あ！ ティア、これなんか似合うんじゃない？」

「どれどれ？ うん・・・」

「これ可愛い〜！」

「それじゃあ、あたしは・・・」

「リオ！ あっちは？」

女性陣五人が、水着売り場であれこれ話しながら水着を選んでいた

ここは、女性用の洋服、下着、水着などを専門に扱っている店である
当然、綾人とハヤトが居るべき場所ではない

二人は店の外で、流れる人並みを見ながら女性陣を待っている
そして、そばには大量の紙袋が置いてある

おわかりだろう

綾人の発した一言により、女性陣の買い物に荷物持ちとして付き合
う羽目になっているのだ

「まさか、こうなるとは思わなかった・・・」

自分が何も考えずに提案した結果、とんでもない状況になったことにさすがの綾人も反省している

「おまたせ〜!!!」

ほどなく、スバル達が店から出てくる

手にはしっかりと各々の水着が入っているであろう袋を持って

「それじゃ、行くか・・・」

「うへ〜・・・」

積み上がっている袋を持ちながら、歩きだす七人

「次はどこ行く?」

「そうね・・・ハヤトは? どこかないの?」

「あ? そんなら・・・」

ティアナの質問に、少し考えたハヤトの出した答えは・・・

「やっぱりここなのね・・・」

「たまにはいいだろ?」

「あんたの場合、しょっちゅうでしょうが・・・」

やってきたのは、ハヤト行きつけのゲームセンターである(荷物は近くのロッカーに預けてある)

「「うう」ところって、あんまり来ないよね」

「うん・・・ちょっと、苦手かも・・・」

見渡しながらそんな話をするリオとコロナ
特にコロナは、ゲームセンターの雰囲気肌に合わない様子である

「綾人さんは？」

「俺はたまに・・・部隊の奴と来たりするかな？」

ヴィヴィオの質問に思い出しながら答える綾人

自身の自主練やリオの稽古なんかもしているので、ほとんど来ない

「で？ お前等はなにするんだ？」

「私は・・・あれですかね？」

ティアナが視線を送る先には、ガンシューティングの筐体があった

「ティアナらしいな・・・」

「あはは・・・」

綾人の感想に頭を掻くティアナ

「よし・・・ティアナ、勝負だ！ あの時の雪辱、今こそ晴らしてやる！！」

「あの時？」

ハヤトの言葉に首を傾げるティアナと綾人

「六課に配属前に俺のハイスコア塗り替えたこと・・・忘れたとは言わせねえ！！」

「忘れたわよ。三年も前じゃない・・・」

「普通忘れるよな・・・」

呆れながら答えるティアナと綾人

「とにかく！ あの頃の俺とは違っつてことを教えてやる！！」

「あゝはいはい……」

適当に流しながら、筐体の前に立つティアナ
その横にハヤトも立つ

「あ、これ新型なんだ……」

「まあ、三年も経ては新しくもなるだろう」

コインをいれ、コントローラを手に持つティアナ

「そんじゃ……またハイスコアで勝負な？」

「分かったわよ……」

珍しく真剣なハヤト

ティアナも、少しだけ顔を引き締める

「ヴィヴィオちゃんはどっする？」

「お兄ちゃんのを見てます！」

「そっか……」

そう言つて、ハヤトの邪魔にならないように、少し離れて見学する
ヴィヴィオ

「俺はどうするかな……」

「先輩！ あれやしません？」

「ん？」

ヴィヴィオの様子を見ながら、どうするか考えていた綾人にスバルが声をかける

そして、スバルが指さす方向を見る

「・・・パンチングマシン？」

そこにあっただのは、パンチングマシンだった

このゲームセンターには、多種類のパンチングマシンがあり、スバルが薦めてきたのは、ボクサーの姿を模していて、体の数箇所にミットがついたパンチングマシンだった

制限時間一分の間にミットにパンチを打ち、スコアを競うタイプで、ミットの位置でポイントも違っている

さらにこのタイプは、アームが一定の間隔で伸びてきてプレイヤーを攻撃してくる

当たっても減点などはないが、気を取られているうちに時間が終わってしまうのだ

綾人が目を向けたときには、三人の高校生ぐらいのグループがプレイしていた

「あんな風にやる物なのかな？」

「いや、違つと思うよ？」

コロナがそれを見て聞いてくると、リオが苦笑いで答える

“あんな風”とは、その三人は同時にプレイをしているのである

三人がかりで高得点を狙おうという魂胆である

「さすがに、あれはハヤトでもやらないだろうな・・・」

「はい・・・」

呆れて見ている綾人とスバル

ハヤトは精々パターンを覚えるぐらいで、ゲーム上の最低限のルールは守るのである（たまたに格闘ゲームで大人気ないことをしているときもあるが・・・）

「まあ、しょうがない・・・隣のもやってるか・・・」

そう言って、そのグループの隣にあるサンドバックを殴るタイプのパンチングマシンに近づく綾人

「最高記録は・・・420!？」

「すげーいー!」

リオとコロナがスコアを確認すると、2位以下（常人）と倍以上の差を付けているトップの記録だった・・・

「それ、前にハヤトがやったら120くらいでしたよ?」

「それが平均だろうな・・・一般の・・・」

ハヤトの記録を知り、どこか安心している綾人

「まあ、とりあえず・・・2位を目指そうか・・・」

1位はまず無理だと悟った綾人
スバルも後ろで頷いている

「ちなみに、スバルさん達はどれくらいなんですか？」

「え？ え〜つと・・・あたしが180ぐらいで、ティアは160
だったかな？」

「ハヤト・・・ティアナよりも下ってどうよ？」

ちなみに、その時はハヤトのセクハラ発言などもあり、ティアナが
怒りに身を任せた結果でもある

それはともかくとして

コインをいれ、マシンの前に立つ綾人
派手な音と共に、ミットが起き上がる

腰を落として左手を後ろに引いて構える綾人

「ふっ！」

一気に拳を突き出す綾人

ドゴツつと鈍い音をさせながらミットが倒れる

そして、ドラムロールとともにスコアが表示される・・・

「記録は・・・250!!！」

「すごいです!!！」

綾人の記録を見て、声を挙げるリオとコロナ
順位は当然というか2位である

「まあ、こんなもんだらう・・・」

綾人としても、結果は上々のようだなにげに、綾人も常人離れしている

「あ、隣も終わったみたいですね・・・」

スバルが言うと、隣のパンチングマシンも、派手な音でゲーム終了を告げていた

「どうだ!?!」

「くっそ〜! だめだ!!!」

「ミットの判定が甘いんじゃないの?」

思いの外スコアが悪かったらしく、悪態を吐く三人組

「ずるいことしてたのにあんなこと言ってる・・・」

「あ!?! なんだこのガキ!!!」

後ろからリオが言うと、不機嫌なまま振り向いてそう聞き返す一人

「やめとけって」

「子供相手になにムキになってんだよ〜?」

相当イライラしているのだろう、リオに詰め寄ろうとするが、他の二人が止める

「うるせえ! この!?!」

二人を振り払い、リオに殴りかかる

「ふん！」

「がっ!？」

だが、リオに届く前に自身へ蹴りが入り、座り込む青年

「ぐう・・・な、なんだよお前!？・・・ひっ!？」

蹴ってきた相手を睨みつけるために顔を上げるが、逆に震え上がってしまった

「セコいマネして逆ギレした上に、子供に手を出そうなんてな・・・

」

そこには、鬼のような形相で睨む綾人がいた

「ひいゝ!!!」

「こ、怖いですゝ!」

「師匠ゝ!」

スバル、コロナ、リオも後ろで震え上がっていた

「どげよ・・・」

「あ!？ うお!？」

一言言つて、襟をつまんでどかし、コインを入れる綾人

「こつやるんだよ・・・」

そして、ゲームがスタートした・・・

「……」

始まって数秒・・・三人は口を開けたまま固まっていた

綾人は伸びてくるアームを最小限の動きで回避しながらミットに的確に攻撃を入れていく

このゲームは、顔が一番高得点に設定されていて、綾人も顔のミットを中心に（打った瞬間が見えないほどの速度で）攻撃している

見る見るうちにスコアが加算され、三人の記録もさつさと超えてしまった

それも、右手一本で・・・

そして、ゲーム終了のアラームが流れ、スコアが表示される

「に・・・20000オーバー・・・」

綾人が右手一本で叩き出したスコアに、驚くしかない三人

このゲームの平均スコアは、7000〜8000ほどで、10000を超えるだけでもすごいのに、綾人は軽々と超えていった

そして、先ほど綾人に蹴られたひとりは、背中に大量の汗をかき出していた・・・

「これも・・・2位か・・・」

そんな三人を放っておいてスコアボードを確認する綾人達

1位のスコアに記されていた数値は・・・60000をオーバーしていた・・・

「どんだけすごいんだよ・・・トップの人・・・人間か？」

スコアを見てそう呟く綾人

人のことが言えるのか気になるところだが

「さて・・・それじゃ、ハヤト達と合流するか・・・向こうも終わってるだろ」

「あ・・・はい・・・」

スッキリした様子の綾人に頷き、ハヤトとティアナがプレイしているガンシューティングの筐体に戻るスバル達

余談だが、三人組はとっくに逃げ出していた・・・

「また・・・負けた・・・」

「お兄ちゃん・・・元気出して!!」

「大袈裟すぎ・・・」

綾人達が戻ると、筐体の前で崩れ落ちているハヤトとそれを慰めているヴィヴィオ

そして、ため息を吐きながら見ているティアナがいた

「どうかしたのか？」

「あ、先輩・・・スバル達も」

綾人達に振り向くティアナは、黙って筐体を指さす

「ああ、終わったのか・・・で、スコアが・・・」

「右が私で、左がハヤトです」

「ふむ・・・ティアナの勝ちか・・・」

スコアは、ティアナの方が3000ほど上だった

「しかも1位ですよ！」

「ハヤトさんは2位だ」

スコアボードには、二人のスコアがそれぞれ1、2位に表示されていた

「畜生！！　なんでだ！？　パターンは完璧に・・・」

悔しがりながら負けた原因を探し始めているハヤト

「あ、そうだハヤト？　ごちそうさま」

「なにが？」

「負けたほうが他のみんなの分も含めてジュースを奢るって事に・・・」

「なるほど・・・」

ティアナの説明を聞いて、ハヤトに目を向ける綾人

「それじゃ、どこかのお店に行きましようか？・・・ほら、ハヤト

もさつさと来る！ 他の人に迷惑でしょ？」

「へいへい……」

渋々立ち上がるハヤト

「あ……」

「どうした？ ヴィヴィオちゃん」

不意に立ち止まるヴィヴィオの視線を追う綾人
その先には

「クレーンゲーム？」

少し古いタイプのクレーンゲームが置いてあり

ヴィヴィオの目は、一つのぬいぐるみに向けられていた

「うさぎのぬいぐるみか……」

ヴィヴィオが見ていたのはうさぎのぬいぐるみだった

「やってみていいですか？」

「ああ。構わないけど？」

綾人が頷くと、スバル達も頷く

コインを入れて、挑戦するヴィヴィオ

「あ……まただ」

しかし、結果は1コイン二回のプレイを三回挑戦してすべて失敗し

ていて

現在、四回目の挑戦のうち一回目が失敗に終わっていた

「惜しかったね……」

「むう……」

悔しがるヴィヴィオ

アームはぬいぐるみを掴みはするのだが、持ち上げた瞬間に落ちてしまうのだ

「しょうがねえな……ほれ、代われヴィヴィオ」

「ふえ？」

見かねたハヤトがヴィヴィオをどかす

「こういうのは、コツがあるんだよ……見てな？」

そう言っつて、アームを操作するハヤト

「真上から無理なんだったら……こういつぶつに……少しずつらして……ここだな」

アームを止めた場所は、ぬいぐるみよりもわずかにずれた位置だった

そして、ゆっくりとアームが降りていき、ぬいぐるみを持ち上げる

「あ……」

「……お……」

持ち上がる瞬間に驚くヴィヴィオと、感心している綾人、コロナ、

リオの三人

ゆっくりと運んで行き、ポストから落下するぬいぐるみ

「ほれよ」

「うん……」

ハヤトからぬいぐるみが手渡され、それを大事そうに抱きしめるヴイヴイオ

「お兄ちゃん、ありがとう！」

「気にすんな〜？」

満面の笑顔でお礼を言うヴイヴイオ

「妹分が困ってるんだ、兄貴としては当然だからな？」

「あ……」

ハヤトの言葉に、うつむくヴイヴイオ

「……はあ……」「……」

「ん？……なに？」

ハヤトの最後の一言に呆れてしまう五人

ハヤトは訳が分からずに聞くが

「お前な……」

「デリカシーなさすぎ……」

「最低だよハヤト……」

「ヒドイですよ！ お兄さん!!」

「ヴィヴィオがかわいそうですよ！」
「は？・・・なんだよ、みんなして・・・」

五人それぞれの言葉にさらに混乱するハヤト

「よし！ 飯食いに行くか！ ハヤトの奢りで！」
「・・・賛成！」
「はあ！？」

綾人の言葉に、手を上げる女性陣

「ヴィヴィオちゃんも来な？」
「あ・・・えつと・・・」

少しうつむいていたヴィヴィオに声をかける綾人
ヴィヴィオは少し考えるが

「気にするな？ ハヤトが全部払ってくれるからな？」
「ちよつと！？」
「それじゃ・・・ごちそうになります！」

綾人に押され、そう答えるヴィヴィオ

「よし！ それじゃ、どこかいい店を探そう！」
「それなら大丈夫だ・・・俺の行きつけの店があるからな？」
「先輩のオススメ・・・期待してます！」
「任せとけて」

などと話しながら、ゲームセンターを後にする綾人達

「無視すんなー！ー！！」

取り残されたハヤトの叫びは、ゲームセンターの大音量の中に埋もれていった・・・

第10話 とある男女のグループデート（後書き）

どうも！

綾人君の不用意な発言により荷物持ちとして駆り出された男二人でした

二台のパンチングマシン・スコアトップの人物・・・誰かのご想像にお任せします・・・一応ヒント・・・『「とある」の最強さん』です・・・あれ？ これ答え？

それに追いつこうとする綾人君も大概ですけどね！

ハヤト君の数少ない見せ場の予定でしたが、最後にやっちゃった・・・

では、次回予告

綾人の紹介した店で、夕食をすることにしたヴィヴィオ達

その帰り、綾人がスバルとティアナの二人にある提案をする・・・

「あの・・・先輩？」

「これなら・・・誰も邪魔できない・・・」

次回、「とある少女達の思い」

次回、少しだけシリアス入ります

第11話 とある少女達の思い（前書き）

今回は少し長いです

そして、後半からちょっとシリアスが入ります

あとがきで、簡単なアンケートも行なっていますが、興味の無い方がスルーで構いませんので

第11話 とある少女達の思い

クラナガンにあるとあるレストラン

そこで綾人達は、早めの夕食を摂っていた（当然、ヴィヴィオ、コロナ、リオの三人は、あらかじめ家に連絡を入れている）

「おいし〜!!」

「ホントです〜!!」

目の前の料理に大喜びのスバルとコロナ

「さすがは先輩のオススメ・・・」

「師匠、凄い!!」

頷いているティアナと賞賛するリオ

「どうだ？ ヴィヴィオちゃん・・・美味しいか？」

「はい！ とつても!!」

隣に座っているヴィヴィオに声をかける綾人

ヴィヴィオも笑って答える

先ほどの一件から、少しだけ持ち直したようである

「お前等・・・」

「ん？ どうしたのハヤト？」

そこに、ずっと黙っていたハヤトの言葉に、スバルが首を傾げる

「どうしたじゃねえよ!!! 食いすぎだろ!? 特にスバル!!!」

「大声出すな。他の人に迷惑だ」

指さしながら叫ぶハヤトに注意する綾人

「しかも・・・こんな高そうな店って・・・金・・・どうしよう・・・」

「そんなこといいから。お前も食べ・・・今更気にしてもしょうがないだろ?」

「誰のせいですか!?!」

綾人にも声を挙げる

「どっちにしても、スバルがいる時点で詰んでるんだ・・・違うか?」

「ぐっ・・・」

綾人の言葉に黙ってしまうハヤト

「ここにギンガまでいてみる? この倍はかかるぞ?」

「ぐっ・・・」

さらに追い込んでいく綾人

そして、(綾人は会ったことないが) エリオまでいた日には間違いなく破産だろう

「畜生! こうなったらやけ食いじゃ!?!」

そう叫び、料理をガツガツと食べ始めるハヤト

「……まあ、これくらいなら……大丈夫だろう……」

ハヤトに聞こえないようにボソリと一言……

二時間後……

「ふう〜……お腹いっぱい!!」

「はい〜……」

お腹をさすりながら満足顔のスバルとリオ

「ちょっと……苦しいかも……」

「うん……」

「二人とも……無理して食べすぎなのよ……ほら、しっかり!!」

少しふらついているコロナとヴィヴィオを支えているティアナ

「さて……」

「どこ行くんだ？ ハヤト」

ふいに立ち上がるハヤト

そこに、トイレから戻ってきた綾人が聞く

「厨房つすよ……料金分の皿洗いの交渉に……」

どこか清々しい顔をして答えるハヤト

「いつの時代の返済方法だよ・・・それに・・・」

綾人がすべて言う前に、通りかかったウェイターに声をかけるハヤト

「あの・・・すみません・・・」

「はい？」

「お代なんすけど・・・」

ハヤトが交渉しようとする

「ああ・・・それなら、綾人さんからもういただいておりますよ？」

「はえ？」

ウェイターが綾人を見ながら言う

綾人も軽く会釈する

「あの・・・先輩？」

「どんな理由にしる、後輩に奢らせる先輩がどこにいるよ？」

振り向いて聞いてくるハヤトにどや顔をしてみせる綾人

トイレに行くふりをして、会計を済ませたのだ

綾人は、このレストランには225隊の任務の後やちよつとした祝い事などで仲間とよく訪れているため、店側に知り合いもいる

「さ！ そろそろ帰るか？」

「「「「はい！」「」「」」」」

綾人の言葉に手を上げて答える女性陣

「どうした、ハヤト？ とりあえず、このことはお前以外全員知ってたからな？」

「あ……はあ……」

しばらく呆然と立ち尽くすハヤトは……

店を出て、ヴィヴィオ、コロナ、リオの三人を自宅に送り届けた綾人達

「そんじゃ、俺は失礼します……先輩、ご馳走様っス……」
「ああ。お疲れ」

ハヤトも自身の寮に戻っていった

「ティアナも自分の寮か？」

「いえ、今日はスバルの部屋に泊まるうかなって……」

「久しぶりですね」

「そうか……それなら、途中まで送ろうか」

そう言つて、スバルの借りているマンションの前まで送ることにした綾人

「それにしても……相変わらずハヤトは変な所でカッコつけるよな……」

「ゲームセンターのことですか？」

「あれは、確かに格好良かったよね？」

ヴィヴィオにぬいぐるみをとってあげていた時のことを話す二人

「ハヤトだから出来ることかもな・・・少なくとも、俺には無理だな・・・」

「そう・・・ですね・・・」

少し、俯きながら答えるティアナ

「だが、最後の一言はいらなかったな・・・」
「はい・・・」

ハヤトがきつぱりと“妹”と言った瞬間のヴィヴィオの表情を思い出しているスバル

「まあ、確かにハヤトにとって、ヴィヴィオちゃんは妹なんだろうけどな・・・傍から見たら仲のいい兄妹だ・・・」

二人の様子を見続けてきての感想がこうだった

「ん？」

「先輩？」

不意に立ち止まる綾人

目線の先には小さな公園があった

「少し・・・寄り道するか？」

「あ、はい・・・」

そう言って、二人を連れて公園に入る

「さて・・・」

公園の広場にたどり着くと、端末を取り出しどこかに連絡を入れている綾人

「あの・・・先輩？・・・え!？」

そんな綾人の行動を不思議に思い、スバルが声をかけると周囲に境界が張られる

「これは・・・」

「練習場なんかでよく使われる簡易境界だ・・・一応、許可下さないと後でうるさいからな・・・」

そう言つて、振り返る綾人は

「これなら・・・誰も邪魔できない・・・」

「「え?」」

そう告げた・・・

【ヴィヴィオSIDE】

それから数分遡る高町家・・・

「ただいま〜!!」

「おかえり〜! ヴィヴィオ!!」

「おかえり」

ヴィヴィオを出迎えるのはとフェイト

「どうだった？ 綾人君との組み手・・・」

「うん・・・とつても勉強になったよ！」

「そう・・・」

それから、綾人との組手の内容から、そのあとのみんなとの出来事を話していくヴィヴィオ

「でね？ この子、ハヤトお兄ちゃんがとつてくれたんだ！！」

そう言つて、うさぎのぬいぐるみを見せるヴィヴィオ

「へえ～・・・かわいいね～」

「うん・・・」

二人もニコニコと笑つて話を聞いていた

「それじゃ、お風呂入つて、歯磨きしてもう寝ようね？」

「はい！」

なのはに返事を返し、風呂場に向かったヴィヴィオ

【綾人SIDE】

「あ・・・先輩・・・？」

「なに・・・を・・・？」

綾人に理由を聞くこととする二人

「さ、デバイス用意しろ・・・」
「「え？」」

突然の綾人の言葉に二人も首を傾げる

「早くしろ・・・持ってたんだろ？」

「あ・・・はい・・・」

「それじゃ・・・」

よくわからないまま、デバイスを起動する二人

「ルールは訓練校の時と同じだ・・・分かるな？」

「あの・・・先輩？」

「行くぞ？」

質問しようとするスバルを無視して、走り出す綾人・・・

【ヴィヴィオSIDE】

「ふう・・・」

風呂から上がり、部屋のベッドに腰掛けるヴィヴィオ

「今日は、楽しかったな・・・」

机に置いてあるうさぎのぬいぐるみを手に取り、そっと抱きしめる

「でも・・・」

不意に、ヴィヴィオの顔が暗くなる

「お兄ちゃんにとって・・・わたしは・・・」

ゲームセンターでのハヤトの言葉が蘇る

妹分が困ってるんだ、兄貴としては当然だからな？

「やっぱり・・・“妹”・・・なのかな・・・？」

ぬいぐるみにそっと呟くヴィヴィオだった・・・

【綾人SIDE】

「「はあ・・・はあ・・・」」

「どうした・・・もう終わりか？」

肩で息をしているスバルとティアナを見ながら聞いてくる綾人

「くっ・・・！」

「やっぱり・・・強い・・・」

綾人を見つめながらそう感想を言うティアナ

「俺は、まだまだいけるぞ？」

二人にそう言う綾人

「こんのおーー!!!」

スバルが殴りかかるが

「遅い……」

その一言で、スバルの拳を受け止める綾人

「なんとも同じことを言わせるな……」

「くっ……ああ!？」

腕を掴み、背負い投げる

「があ!？」

思い切り叩きつけられるスバル

「クロスファイア……」

「ん?」

後ろからの声に振り向く綾人

そこには、スフィアを展開したティアナがいた

「ほお?」

「シューーート!!!」

間髪いれず攻撃を開始するティアナ

「甘いな・・・それも同じだぞ？」

そう呟き、ティアナに突っ込む綾人だが

「ん？」

何か違和感を感じ、立ち止まる

そして、一発のスフィアが迫るが・・・

「・・・幻術？」

そう呟くと同時に、弾丸は綾人の体を通り抜けていった

「・・・そう来るか・・・さて・・・」

周囲を見渡す綾人

スバルの姿も消えていた・・・

【ティアナSIDE】

「スバル・・・大丈夫？」

「う、うん・・・まだちょっとフラフラするけど・・・」

少し離れたところでスバルと合流したティアナ

「ティア……どうしょ？」

「先輩の真意は分からないけど……このまま負けるのも嫌よね……」

そう答え、考え込むティアナ

「先輩なら、すぐにここを見つける……だったら……こっちから行かないとね……」

「うん……でも、どうやって？」

「そうね……ここは……」

スバルに作戦を伝えるティアナ

「それって……」

「正直……感覚で私の幻術を見破っちゃう先輩に通用するか分からないけど……これしかないでしょ……？ それに……」

いったん言葉を切る

「こっちの勝利条件が“あれ”なら……これでいけるはず……」

「そうだね……了解！」

互いに頷きあう

「作戦会議は、もう済んだか？」

「……！？」

同時に、近くから声が聞こえてきた

【綾人SIDE】

「その距離じゃ、俺から離れたことにならないぞ？」

ゆっくりとティアナ達のところに向かう綾人

二人も姿を見せる

「スバル！」

「応！！」

「ん？」

ティアナの声を合図に、スバルが地面に向けて拳を振り下ろす

そして、土煙があたりを包む

「目くらましか・・・随分と古典的だな・・・」

そう言いながら、辺りに神経を集中させる

（右がティアナ・・・左がスバルか・・・）

二人の大まかの位置を確認し、対処するために構える綾人

そして、二人が飛び出してくる

「何！？」

綾人が一瞬だけ驚く

“左から” ティアナ、“右から” スバルが飛び出してきたのだ

(!?!? 幻術!)

すぐにトリックを見破る綾人だが

「うりゃああああ!!」

「シューート!!」

思い切り声を張り上げる“ティアナ”とスフィアを形成する“スバル”が同時に綾人に攻撃する

「くっ!!」

スバルの攻撃を受け止めようとする綾人に、ティアナのスフィアが迫る

そして・・・

綾人の手が腰に伸びた

「合格だ・・・」

「あ・・・」

拳を握られていたスバルの目が見開かれる

綾人の手には、相棒の『バルムンク』が握られていたのだ

「や・・・やった！」

「初めて・・・勝てた・・・」

地面に倒れこむスバルとティアナ

「まったく・・・読みは正しかったのにな・・・」

ため息を吐きながらデバイスをしまう綾人

あのととき、綾人の読みは間違っていたが、飛び出してきた本人を見て、一瞬だけ揺らいだ・・・その一瞬が二人に勝機を見せたのだ

ついでに、回避するとスバルにあたってしまったため、綾人が躊躇したのも要因のひとつである

天童綾人、最大の欠点・・・それは、大切な友人や家族に、いかなる理由でもケガをさせたくないと思う優しさという甘さ

綾人は、ティアナの幻術をほとんど感覚で見切れるが、少しだけラゲが存在するのだ

「しかし・・・あのコンビネーションは見事だったな・・・？」

「実は・・・三年前・・・同じようなことをしまして・・・」

「三年前って言うと・・・」

「はい・・・『JS事件』です・・・」

綾人に答えるティアナ

三年前の『JS事件』で、他のフォワードと孤立したスバルとティ

アナの二人は、当時敵だったチンク、ノーヴェ、ウエンデイ、デイードの四人と戦い、窮地に追いやられたが、先ほどの戦法で見事に勝利を収めたのだ

「先輩に通用するかは賭けでしたけど・・・勝利条件を考えれば、行けるかな・・・って」

「なるほどな・・・」

綾人も頷く

ティアナの言う“勝利条件”とは、訓練校時代に綾人が二人（正確にはハヤトを入れて三人）に提示したもので

当時、三人の相手を素手で行なってきた綾人が「デバイスを握らせることができたらお前等の勝ち」と言ったことが原因だった・・・

だが、この勝利条件でも、三人は一度も勝利できていなかった

二人の息もだいぶ落ち着いてきたようで、ティアナが口を開く

「あの・・・先輩・・・聞いていいですか？」

「・・・お前等の本音を聞くためだよ・・・」

真意を確かめようとするティアナに先に答える綾人

「本音・・・？」

首を傾げるスバル

「普通に聞いても、多分はぐらかすだろうし、だったら思い切り疲れたところに付け入ろうってな・・・」

「そんなめちやくちな・・・」

綾人の言葉に呆れるしかないティアナ

「それで・・・聞きたいことって？」

「ああ・・・」

スバルの質問に、ゆっくりと切り出す綾人

「正直・・・お前等、まだ諦めきれてなかったろ？・・・ハヤトのこと・・・」

「あ・・・」

綾人の言葉にハツとなる二人

「最初はきっぱり諦めるつもりだったのに、あいつはいつも通りに接してくるから、難しくなった・・・違うか？」

「それは・・・」

スバルが答えようとするが

「いいんじゃないのか？　それで・・・」

「え・・・？」

綾人が先に言う

「二人とも初恋だろ？・・・真剣に好きになっただ・・・簡単に吹っ切るのは難しいだろう・・・」

その場に座って、話を続ける綾人

「それに、たとえハヤトに思いが伝わらなくても、あいつを嫌いになるわけじゃないだろ？」

「も、もちろんです!!」

スバルが勢い良く答える

「だったら・・・あいつを好きなままでいればいい・・・同じようにあいつを真剣に好きになったヴィヴィオちゃんのためにもな？」

そう言っただけで立ち上がる綾人

「俺からはそれだけだ・・・それじゃ・・・そろそろ行くか・・・」

「はい!!」

綾人に、しっかりと返事を返し、二人も立ち上がる

「しかし・・・ティアナ？」

「はい？」

「バリアジャケットのデザイン・・・考えたほうがいいぞ？」

「え？」

綾人の言葉に首を傾げるティアナ

「・・・そんな格好で地面に倒れたら・・・俺の中の野性がうずく・・・」

「・・・!!？」

綾人の言葉の意味を察し、バツと思いきりスカートを押さえるティアナ

「なるほど・・・ティアナは黒がお気に入りが・・・いいセンスだ」
「せ・・・先輩!!!」

綾人のお得意のいらん一言にティアナが一気に詰め寄る

「どうして、最後の最後でそういうこと言っんですか!？」

「・・・俺だから？」

「理由になってませんよ!!!」

などと、騒ぎながらスバルの部屋まで向かう綾人達だった・・・

第11話 とある少女達の思い（後書き）

どうも！

前半はギャグ多め、後半はシリアス多めでお送りしました。

途中、ヴィヴィオの部分を入れることで、リアル感を出してみました。が・・・いかがでしたでしょうか・・・？

スバルもティアナも、多分簡単には吹っ切ってないだろうと考えた結果、こういうことをしてみました。

綾人君はヴィヴィオの恋を応援すると共に、後輩二人のケアもしたいと思ったんです。

しかし、ストライカー二人を素手で相手にしてる綾人君・・・ここまで強くすればいんだろうか・・・

「憂鬱」での戦闘シーンはおそらくそんなには出てこないでしょう・・・基本はラブコメですので・・・

さて、次回予告を・・・

季節は夏

そして、ヴィヴィオ達小学生には、この季節ならではのイベントが・・・！

次回、「とある少女達の夏休み・準備編」

次回、ようやくの登場のあの方が・・・

さて、それではアンケートの時間です

簡潔に言えば、『綾人君にフラグは必要か?』というものです

ラモン先生に聞いてもいいんですけど、この際みなさまの意見も聞いてみたいと思います

まあ、基本的に、ヴィヴィオとハヤト君の恋を応援する物語ですから、なくてもいいんですけどね・・・

アリと言う読者さんには、さらにアンケートを行います

ズバリ! 『相手は誰がいいか?』ですね

候補は

1、リオ

2、なのは

3、ハヅキさん(?!?)

4、その他

この中から選んでください

4の方は、キャラ名も書いてくださいね

注意点は

スバル、ティアナ、ヴィヴィオは対象外です！

この一点だけですの〜

興味の無い方、そして、そんなのは必要ないと思った方はスルーしてもらって構いませんので〜

ではではー！！

第12話 とある少女達の夏休み・準備編（前書き）

さて、今回からしばらく『夏休み編』に突入です！

え？ もう十月だって？

・・・細かいことは気にしない！ スクオンだって、八月に年末年始のお話やったんですから！！

第12話 とある少女達の夏休み・準備編

7月の中頃のとある日曜日の昼下がりに

「そういえばヴィヴィオ、もうすぐ夏休みだね？」
「うん！ 来週からだよ！」

なのはと一緒に買い物をした帰り、不意にそう聞かれるヴィヴィオ

「そこでね？ 一つ提案があるんだけど」
「なに？」
「実はね〜」

なのははあることをヴィヴィオに教える

「ほんと!?!」
「うん！」
「それなら、コロナたちも誘ってもいい!?!」
「もちろん！ あ、無理にはダメだよ？」

ちゃんと釘をうつつなのは

「は〜い！ それじゃ、早速メールしよう!?!」

端末を取り出し、コロナとリオの二人にメールを送るヴィヴィオ

メールを打つ指がとんでもなく早い・・・

「にやはは・・・」

その様子を笑顔で見ているのは

「あ、なのはママ。それっていつ？」

「え〜つとね・・・8月の13日から15日の三日間だね」

「ふむふむ・・・あ・・・」

なのはに教えられた日にちをメールに打ち込んでいくヴィヴィオの手が止まる

「お兄ちゃんも・・・誘ってみようかな・・・」

そうつぶやくヴィヴィオ

「いいんじゃない？ 誘うだけなら」

「迷惑じゃないかな？」

「でも、ヴィヴィオは一緒に行きたいんでしょ？」

「うん・・・」

「なら、まずは行動だよ！」

「あ・・・うん！」

なのはの言葉に頷き、メールの送信欄にハヤトの名前を追加送信したヴィヴィオ

【ハヤトSIDE】

「夏休み〜？」

「そう、夏休み。ハヤトはとつた？」

地上本部の食堂で、ルネッサの面会に来ていたティアナとまた食事
をしているハヤト

「ティアナはとつたのか？」

「ええ。こういうのは、早めに言っとかないと後で大変だしね」

「ふむ・・・ん？」

「メールを受信しました」

カレンダーを見ながら考えているハヤト
そこに、クロスハートへメールが入った

「ヴィヴィオからだな・・・ふむ・・・」

「なんて？」

「クロスハート。メール頼む」

「了解です。マスター」

そう言つて、クロスハートに内容を伝えるハヤト

【綾人SIDE】

「夏休み？」

「はい！ 来週から、私達夏休みなんです！」

いつものように練習を見てくれる綾人に、そう告げるリオ

「そうか・・・もうそんな時期か・・・どこか行くのか？」

「いえ・・・お父さんもお母さんも忙しいみたいで・・・」

どこか寂しそうに答えるリオ

「そっか・・・」

そんなリオを見つめる綾人は

「それなら・・・俺とどこか出かけるか？」

リオにそう提案する

「師匠と？」

「ああ。ただ、俺の休みが8月しか取れないけど・・・それでも構わないんだけど・・・どうだ？」

「行きます!!」

元氣よく答えるリオ

「いつ行くんですか？」

「そっだな・・・」

カレンダーを展開し、日にちを確認する綾人

「8月の13・14・15日の三日間だ・・・その三日は空けておいてくれ？ 必要な物は、後で教えてやるから」

「わかりました!!」

「それじゃ・・・続きだ・・・もう少し、速く足を振り上げてみる・・・あの能力”に頼らず、自身の力だけでな？」

「はい!!」

構え直し、指導を再開する綾人達だが、そこに・・・

「メールです」

リオのデバイス『ソルフェージュ（通称：ソル）』が点滅しながら伝える

「ヴィヴィオから？・・・あ・・・」

「どうした？」

メールを見て顔色の変わったりリオに。綾人も不思議に思い声をかける

「その・・・ヴィヴィオから、夏休みのお誘いが・・・おんなじ日にちで・・・」

リオが綾人にメールを見せる

8月13日から15日までの三日間、家族で出かけるんだけど、リオも一緒にどう？ コロナも誘う予定んだけど・・・

「ふむ・・・どうする？」

「えっと・・・今回は、断ろうと思います・・・」

「いいのか？」

俯きながら答えるリオに確認する綾人

「はい・・・タッチの差ですけど、先に約束したのは師匠ですし・・・それに、ヴィヴィオ達とは学校とかでもいっぱい遊べますから！」

ぎこちなく答えるリオ

「そっか・・・なら、その三日間は予定通りにな?」

「はい!!! あ、ソル! メールの返信。内容は・・・」

ソルフエージユに内容を伝え、ヴィヴィオに返信したりオ

そして、改めて練習を再開した二人だった・・・

【ヴィヴィオSIDE】

「あ。メール返ってきた!」

携帯にメールの受信を確認したヴィヴィオは、それぞれ確認していく

「えっと・・・コロナはOKで・・・あ、リオはダメだって・・・」

「そっか・・・まあ、しょうがないね・・・こればかりは」

落胆しているヴィヴィオにそう答えるなのは

「あ・・・もう一件・・・お兄ちゃんだ!」

慌てて内容を確認するヴィヴィオ

「あ・・・」

「ハヤト君・・・どうだった?」

「うん・・・その・・・」

なのはにメールを見せる

汝のお誘い、しかと聞き届けたり

「これって・・・OKってことかな？」

「多分・・・そうかも・・・」

なのはにそう答えるヴィヴィオ

「よかったね？ ヴィヴィオ？」

「うん！！」

頷くヴィヴィオの顔は真っ赤になっていた

「さ、家に到着〜！」

「ただいま〜！」

「あ、おかえり。なのは、ヴィヴィオ」

「あ。フェイトママ！」

玄関をくぐると、仕事から戻っていたフェイトが迎える

そして、なのはは靴置き場にある三足の靴を見つける

「あれ？ お客さん？」

「うん・・・はやく達が来てるんだ」

「そうなの？」

そう言って、リビングに向かうのはとヴィヴィオ

「お〜、なのはちゃんにヴィヴィオ。ご無沙汰や〜」

「お久しぶりです〜！」

「お邪魔してます！！」

リビングに入ると同時に挨拶をしてくる三人

元・機動六課部隊長『八神はやて』とそのパートナーでありユニゾンデバイス『リインフォース？（ツヴァイ）』、そして、はやての家族の一人で、ヴォルケンリッター守護騎士の一人『シャマル』の三人である

「三人とも。いらつしやい！」

「お久しぶりです！」

なのはとヴィヴィオもそれぞれ答える

「珍しいね？ どうしたの？」

「いやな？ 時期的には“あの日”が近いやろ？ そこで、二人も誘おうかなって」

「うん・・・母さんからメールが来てて、それで、私もその日はお休みもおうかなって」

「そっか・・・うん！ 私もヴィヴィオも、その日は行く予定だから大丈夫だよ？」

久しぶりの三人での会話に花を咲かせるのは達

「それじゃ、ヴィヴィオにも話したのね？」

「はい！ あと、ヴィヴィオのお友達と、ハヤト君も」

「お！ それはほんまか！？」

シャマルに答えるのはから出てきたハヤトの名前を聞いて身を乗り出すはやて

「はい。さつき誘ったらOKをもらいました・・・」

「ええな～・・・それで？ 二人の仲はある程度進展したんか？」

面白い話題にはとことん突っ込んでいくのが八神はやてと言う人物である

「それが・・・特には・・・」

「あちや～・・・ハヤト君とんだけ鈍感や・・・よし！ こうなったらその日は勝負や！」

「「勝負？」」「」

拳を握って宣言するはやてに首を傾げる高町親娘とその後見人

「そつや！ 二人つきりを演出したるから、そこで思い切って告白や！ー！」

「ふえ！？」

「こ、告白！？」

はやての男らしい作戦に驚くしかないのはとフェイト

「ああいうタイプに、回りくどいのは効かん！ それなら、ドストレートに行っただればええねん！ー！」

「そうかもしれないけど」

「あれ？ ヴィヴィオ？」

暴走気味のはやてを抑えようとするのは

そして、フェイトは黙り込んだヴィヴィオに気づき声をかけるが、
当の本人は・・・

「……告白……そんな……」

顔を真っ赤にしてうつむいていた……だが……

「でもでも、お兄ちゃんに想いを伝える絶好の機会かもだし、でもOKされなかつたらシヨックだし……仮にOKされたとしてお兄ちゃんをなんて呼ぼうかな？　ここはやっぱり『ハヤトさん』かな？　でも、いきなりはさすがに恥ずかしいから、しばらくは『お兄ちゃん』で、それでもって結婚式はやっぱり……」

大分妄想が飛躍した

「ヴィ、ヴィヴィオ!？」

「落ち着くです〜!!」

慌てて駆け寄るなるとリイン

「はやて……」

「あ……すまん……いやホンマに……」

ジト目で睨むフェイトに頭を下げるはやてだった……

第12話 とある少女達の夏休み・準備編（後書き）

どうも！

それぞれの夏休みへの前準備のお話でした・・・

世にも珍しい『暴走しかけたヴィヴィオ』でした

そして、はやてさんもようやく登場です・・・

いや～・・・ユーノ君ですら先に出てきたのに、それから大分たつてようやくの登場・・・ファンの方はお待たせしました！！

今回はリンさんとシャマル先生だけですけど・・・もちろんヴィータさんやシグナムさんも出てきますよ～・・・予定では・・・

さてではそろそろ次回予告を・・・

夏休みに入り、約束の日がやってくる・・・

綾人とリオ、ヴィヴィオとハヤトの四人は・・・それぞれの目的地を目指してミッドを発つ！！

「行ってきます～す！」

「しゅっぱーっ！ー！」

次回、「とある少女達の夏休み・出発編」

さて、本格的に物語を動かす時が近づいてきたな・・・

それと、アンケートの回答、ありがとうございます！！

と言っても、それほど集まっているわけでもないんですがね・・・
せっかくなっちゃってるんだし・・・結果を踏まえて何かやろうと思いま
す・・・

『アンケート一位のキャラと綾人君とのお話』でも書こうかな・・・
？

こんなの面白そうだというのはあれば、一緒にどうぞ・・・

アンケートはまだまだ募集してますので

詳しい内容は、前回のあとがきと9月27日の活動報告をご覧ください
さい

PV50000件突破記念小説 とある新人とのファーストコンタクト（前書き

ロテーション無視の突然の投稿・・・

これは、ラモン先生の新作とはまったく関係ないので、ご安心ください

PV50000件突破記念小説 とある新人とのファーストコンタクト

第一管理世界『ミッドチルダ』北部・第四陸士訓練校

若い魔導師達が日々、それぞれの夢にむかって厳しい訓練を続けている

そんな訓練校の廊下に、ひとつの足音が響く

「おゝい！ 天童く！！」

「・・・ん？」

その足音の主は、目的の人物に手を振りながら駆け寄っていく

「こんなところにいたのかよ・・・まったく探したぜ？」

「別にいいだろ？・・・それで、何の用だよラウス？ つまんない要件なら・・・」

「なに・・・？」

「・・・たたつ切る」

「ひい！！」

極めて低い声でそう告げる青年、天童綾人と脅されてビビる青年“ラウス・ボート”

「ま、まあ、そんなにつまなくもないって・・・今度の“合同訓練”のこと・・・なんか聞いたか？」

「いや・・・興味も無いしな・・・」

ラウスの質問にそれだけ答える綾人

「そうたるそうたる．．．そこで、俺の仕入れてきた情報がだな．．．」
「どうでもいい．．．じゃあな．．．」
「って、聞けよ!」

ラウスが話したそうとするのを無視して歩き出す綾人
後ろから声がするが、まったく気にせず去っていく

それから二日後．．．

大型の訓練場に集合した綾人達

「よし! 今日以前から連絡のあった下級生との合同訓練だ!
各自、指定のペアとチームを組み、この一週間ともに訓練を受け
ていくこと! いいな!」
「はい!」

指導官の言葉に返事を返す訓練生達

「それでは、一時解散!! 各自の担当するペアのもとへ行くよう
に!」

それだけ伝えると、指導官は準備をしに戻っていった

「天童! お前のペアって誰だよ?」
「ふむ．．．ペアじゃないな．．．“トリオ”みたいだな」

渡された資料を見ながらラウスにそう答える綾人

「トリオ？ 珍しい〜・・・」

「ま、俺も“シングル”だしな・・・ちょうどいい」

「あ・・・悪い・・・」

綾人の一言に頭を下げるラウス

「なんでお前が謝るんだ？」

「いや・・・だってよ・・・お前が“シングル”になった原因って・・・俺じゃん？」

「・・・別に前が原因じゃない・・・遅かれ早かれバレることだったんだ・・・仕方ない」

「そうだけど・・・」

「なら、その話はもうナシだ・・・いいな？」

「・・・わかったよ・・・」

綾人の言葉に、渋々ながらも話を中断するラウス

「そろそろ時間だな・・・それじゃあな？」

「おう！ また昼になー！！」

そう言って別れてそれぞれの担当の元へ向かう綾人とラウス

「「」・・・だよな？」

指定された集合場所に来たのだが、誰も居なかった

すると・・・

「ほら！ もう集合時間過ぎてるんだから急いで！！」

「わくってるから、引つ張んなって！ 腕が取れる」

「だったら、走んなさい！！」

「ハヤト！ 早く！！」

遠くから、喧嘩のような声が近づいてきた

「「「あ・・・」」」

「・・・」

そして、ほぼ無表情の綾人を見つける三人

「・・・お前等が、32班？」

「あ・・・は、はい！！ 遅れてすみませんでした！！」

「すみません！！」

「すんません」

綾人の言葉に、慌てて謝る二人の少女と、反省してるのかしてないのかわからない謝り方の少年

「・・・まあ、別にいいけどな・・・それで、名前は？」

「あ・・・テイ、ティアナ・ランスターです！」

「スバル・ナカジマです！」

「ハヤト・ロックウエルです」

自己紹介をする三人

「・・・天童綾人だ」

綾人も短く自己紹介を済ませる

「・・・それじゃ、さっさと行くぞ・・・」

「あ、あの〜」

「あ?」

歩き出そうとする綾人に話しかけるスバル

「その、お、怒らないんですか?」

「何を?」

「えっと・・・遅れてきたこと・・・とか・・・」

「別に・・・どうでもいい」

おずおずと切り出すスバルに返ってきたのは、思いもよらない言葉だった

「え?」

「お前等が遅刻して成績が落ちようが、俺には関係無いしな・・・
そこまで面倒見る義理もない。お前等の成績を落とすつもりは無い
し、上げるつもりもない・・・」

淡々とそれだけを言う

「あと・・・」

「な、なんですか?」

一度言葉を切る綾人にティアナが先を促す

「俺に必要以上に関わらないほうがいい・・・でないと、痛い目を

見ることになる……」

「え？」

「あの、どういう……」

「それだけだ……もう時間だな。行くぞ……」

綾人の言葉の真意を聞く前に、綾人が話を終わらせて歩いていってしまう

ティアナ達は、よく分からないまま綾人について行った……

「それでは、今日の訓練を始める！ 今日から一週間は、上級生と合同訓練と言ってはいるが、内容は基本的にいつもと変わらない、では、各自移動……」

「はい……！」

指定された場所へ移動していく訓練生達

「まずはラン&シフト……スバル？ もう大丈夫よね？」

「もちろん……！」

「どうだかね……初日であんなことしたくせに……」

「む……ハヤトの意地悪……！」

順番待ちの間、そんな話をしている後輩三人

「あの……天童先輩……！」

「あ……？」

少し離れて訓練を見学している綾人に、ティアナが話しかける

「その・・・先輩のデバイスは・・・」

「・・・支給のボールスピア・・・」

「つまり、前衛なんですね？」

「ああ・・・」

それだけ聞くと、ティアナがプランを立てる

「そういうお前等・・・ランスターとナカジマのは・・・自前か？」

「あ・・・はい！　そうです！！　実はこれ・・・」

綾人がスバルとティアナの持っているデバイスを見て聞くと、スバルが前に出て見せるが

「そこまで聞いてない・・・」

「あ・・・」

綾人は相変わらず話を強制終了させる

「次！　32番！！」

「「はい！」」「うーい」

スタート位置に立つ四人

「・・・プランは？」

「あ、はい。スバルと先輩に先行してもらって、私とハヤトでフォロ―します・・・」

「・・・わかった」

「よろしく願います！」

「・・・ああ」

前傾姿勢でスタートの合図を待つスバルと横で準備する綾人

「ゴー!!!」

笛の音と共に走り出スバルと綾人

ティアナとハヤトもそれに付いていく

コーンを曲り、フラッグポイントにたどり着く

「よし！ 次!!!」

「うまくいったね!!!」

「そうね・・・先輩も合わせてくれたし・・・」

「その先輩は、とっくに行っちゃったけどな？」

「あ・・・」

ゴール地点で話しているスバルとティアナだが、ハヤトの言つとおり、綾人は終わると同時に戻っていった

「なんか・・・暗い人だよな？」

「そうね・・・なんか、近寄りづらいというか・・・」

「な〜んか、入ったばかりの頃のティアナみて〜・・・」

「あ、なんかわかる〜」

「どういう意味よ!!!」

「さっさと来い・・・」

「あ、はい!!!」「う〜い」

いつまでもしてそんな言い争いを一言で両断する綾人

その後の垂直飛越や、その他の訓練も何事も無く済ませたハヤト達
綾人はティアナにプランの確認だけをして、それ以上のコミュニケ
ーションを図ることはしなかった

そして、昼休み

「や〜つと飯か〜!」

「お腹すいた〜!」

昼食のチャイムが鳴ると、伸びをしながらそういうハヤトとスバル

「あ、先輩……お昼は……」

「先約がある……」

「あ……」

昼と一緒に摂ろうと誘う前に、断られてしまうスバル

「ま、そうなるだろうな〜」

「そうね……」

立ち去る綾人を見つめながら、何となく予想が付いていたハヤトと
ティアナ

校舎、屋上にて……

「おい、天童〜！」

「こつちよ」

「ああ・・・」

屋上に出ると同時に、綾人を呼ぶ二つの声

一人はラウス、そしてもう一人・・・女性訓練生がいた

彼女の名前は“クリスティ・グラムゼル”（愛称：クリス）、綾人が訓練校に入った当初からの友人である

「悪い。すこし遅れた・・・」

「大丈夫よ？ 私達も来たばかりだしね？」

「そうそう！」

綾人の手に持っている物を見ながら答えるクリスとラウス

「こつちがラウスの分・・・こつちがクリスの分な」

「ありがとう」

「サンキュー！！」

それぞれに持ってきたものを渡す綾人

「いや〜、天童が友達のおかげで食費が浮いて助かるわ〜」

「・・・後で金取るか・・・」

「ごめんなさい」

ラウスが冗談を言うと、割と本気で考える綾人
即座にラウスも謝る

綾人が渡したのは二人の弁当である

最初は自分の分だけを作って食べていたところを見つかり、それから三人分を作ることになった

綾人としても、おかずが余る心配がなくなり助かってはいるので、断ることはなかった・・・

そして、自分も最後の一つを開ける

「ではでは・・・」

「今日のおかずは何かな？」

二人同時に蓋を開けると、そこには色とりどりの料理が輝いていた

「うめ〜！」

「本当にね」

「自分で不味いもの作らねえよ」

喜びながら食べる二人にそう答える綾人しかし、やっぱり顔は笑っていなかった・・・

「それで？ どうだった？」

「なにが？」

食事が終わる頃、思い出したように綾人に聞くラウス

「合同訓練！ お前の担当、トリオだったんだろ？」

「そうなの？」

「まあな……」

クリスが驚いて綾人に確認すると、短く答えて頷く綾人

「俺のところは、なかなか面白い奴らだったな〜……俺達のペアと息も合ってるし」

「もともと、ペアもそこらへんを考慮して考えてるんだから、当然じゃない？」

綾人に聞いたはずなのに、自分のことから話すラウス

「クリスは？」

「私？ そうね……少し、危なっかしいと思ったかな？……まあ、ウチの相方が前衛の子をカバーしてくれるから、私も後衛の子のサポートに専念出来るからね……」

「そうか……」

クリスマスも、思い出しながら答える

「で、綾人は？」

「……いきなり遅刻してきた……」

「「は？」」

三人との出会いから順に話していく綾人

「ほ〜……なかなか面白い奴らだね〜」

「そうだな……特に、ロックウェルからはお前と同じ臭いを感じた……」

「あ〜……モブキャラ臭？」

「誰がモブキャラだよ!!!」

「お前だよ」「あんたよ」

ラウスのツツコミに二人同時に答える

「しかも、そのロックウエルって奴・・・女の子二人とチーム組むなんてな・・・リア充め!!」

「それを、お前が言うのはどうかと思うが？」

綾人がラウスにツツコミを入れながら隣を見ると、クリスの顔が赤くなっていた・・・

「ラウスにはクリスが居るんだから大丈夫だろ？」

「あつたりまえよ!! クリス以上の女なんていないぜ!!」

拳を握って力説するラウス

「普段の強気な態度の中から、たまに見せる女の子な部分なんてもうサイクグハア!？」

言い終わる前に殴り飛ばされるラウス

「恥ずかしいことを大声で言わない!!」

殴り飛ばしたのは、顔を赤くしていたクリスだった

「相変わらずのラブラブっぷりで・・・」

「う、うるさいわよ!!」

綾人にも睨み返すクリス

クリスはラウスの彼女で、付き合い始めてもう一年である
ラウスはことあるごとにクリスへの愛を叫び、そのたびにクリスに
殴り飛ばされている

「ま、お幸せに・・・」

そう言うと、二人の弁当箱を包み直して、屋上から出ていく綾人

【ラウスSIDE】

「ふゝむ・・・」

「どうしたのよ？ ラウス」

綾人が出ていくのを見届けた後、うなり出すラウス

吹き飛ばされた状態のため、壁にめり込んでいる

「正直さ・・・俺、あいつに弁当作ってもらう資格ないんじゃない？」

「あ・・・」

「あいつが“ああ”なったのは、俺が原因なのにさ・・・」

「ラウス・・・」

うつむくラウスのそばによるクリス

「ラウスのせいじゃないわよ・・・あれは・・・タイミングが悪か
ったのよ・・・」

「そう、かな・・・」

「そうよ・・・綾人だって“折を見て話すつもりだった”って言う

てたじゃない」

「そうだけどさ……」

クリスの言葉に、納得ができないラウス

「やっぱ……このままじゃ、いけねえよな……」

そう呟いたラウスは、何かを決心した顔をしていた……壁にめり込んだままで……

どうも！

突然の記念小説の投稿・・・申し訳ありません！我慢できなかったんです！！

記念小説は、軒並みシリアス展開が目立つな・・・『信念』でもこっちでも・・・

この記念小説限定のオリキャラ

ラウス・ボート君とクリステイ・グラムゼルちゃんについてですがラウス君は、完全に新しく考えたキャラですが、クリスちゃんに関しては『信念』の考案中に考え出されたオリジナルヒロインでもあるんです

・・・性格とかは変わっていますけど

ティアナの性格ですが、すでに改変済みということ・・・

どうでもいいですけど・・・“おかず”ってカタカナで書くと、卑猥じゃないですか？

次回予告はしません・・・記念ですからね

最後にもう一度・・・

この小説は、ラモン先生の新作とはまったく関係ありません

第13話 とある少女達の夏休み・出発編（前書き）

強気に三回目の投稿！！

番外編を数に入れなかったことにしました！

第13話 とある少女達の夏休み・出発編

8月12日・午後6時

「それじゃ、部隊長・・・お疲れ様です!」

「ああ・・・しっかりと休め?」

仕事を終わらせ、隊舎を出る前に部隊長であるマークに声をかけていく綾人

「本当ならば、俺も一緒に行きたかったがな・・・仕方あるまい・・・日を改めて行くでしょう・・・」

「はい・・・報告はしっかりとしておきます・・・父さん?」

「ああ・・・頼むぞ?」

それだけ話すとマークと別れ、すれ違う部隊の隊員達に挨拶しながらパーキングに到着し、止めてあるバイクに乗り込む綾人

「とりあえず荷物取りに行って、そのあとにリオの家だな・・・」

そう呟き、発進する綾人

【リオSIDE】

同日・午後7時

「えっと・・・三日分の着替えと、水着・・・あとは・・・」

綾人が迎えに来る時間までの間、荷物の確認をしているリオ

「そういえば……どこに行くのか……まだ教えてもらってなかったな……」

綾人に聞いても「当日までのお楽しみだ」と言われて、どこに行くのかを未だに知らないリオ

必要な荷物と、出発の日時、そして異世界ということしか教えられていない

「まあ、師匠だし……変なところじゃないと思うけど……大丈夫だよ……?」

誰も居ない部屋でポツリと呟くリオ

そこに

「リオ〜！ お迎えよ〜!!」

「あ、はい!!」

母親の呼ぶ声に、荷物を持って部屋を出ていくリオ

「あ、師匠!!」

「よう、リオ」

玄関で、母親と話している綾人に声をかける

「それじゃ、お母さん。行ってきます!!」

「ええ……綾人さん、娘をお願いしますね?」

「もちろんです。リオはちゃんと守りますので」

母親にしっかりと答える綾人

リオの母親と、そしてこの場には居ないがリオの父親も、綾人のことを認め、信頼している

出会ったその日に家に招待され、父親と軽く組み手をしていたり、杯を交わしたりしていたり・・・

すっかり家族同然に扱われている

「それじゃ、行くか？」

「はい！！」

そして、リオにヘルメットを被らせ、バイクの後ろに乗せる

「しっかりと掴まっとけよ？」

「はい！！」

リオが腰に手をまわし、しっかりとしがみつくのを確認し、発進する綾人

「行つてきます！！」

振り向きながら母親にそう叫ぶリオ

母親も、手を振りながら見送った・・・

【ヴィヴィオSIDE】

8月13日・午前9時・・・

「ヴィヴィオ？ 準備できた？」

「うん！ 出来たよ！！」

なのはの呼ぶ声に答えながら、荷物を持って玄関に降りるヴィヴィオ

玄関では、なのはとフェイトがそれぞれの荷物を持ってヴィヴィオを待っていた

「エリオとキャロは、向こうで合流だね」

「お兄ちゃんもそこで待ってるって」

「はやてちゃん達は？」

「シグナムとアギトが少し遅れるらしくて、それを待つてから行くって」

「そう・・・それじゃ、あとはコロナを迎えに行くだけだね？」

「うん！！」

「しゅっぱーっ！！」

・
ヴィヴィオの掛け声とともに、フェイトの車で出発するのは達・

【ハヤトSIDE】

同日・午前9時30分

「ふいっ・・・ちいと早かったか・・・」

「約束の30分前ですよ？ マスター」

待ち合わせ場所に到着したハヤトに時間を報告するクロスハート

「しょうがねえだろ・・・ティアナが急かすんだから・・・」

出発前にちよつとゲームをしようとしていたところ、やたらとティアナが急かしたために早めに出発させられたハヤト

ティアナ曰く

「女性を待たせちゃだめ!!」

とのこと

「ま、確かに高町一尉やハラOWN執務官を待たせるのはやばいだろうしな・・・」

「ヴィヴィオさんはよろしいのですか？」

「そういう意味じゃねえけどよ・・・」

クロスハートの質問にそう答えるハヤト

妹分であるヴィヴィオに対して、情けない姿を見せるのもいだけないのだろう

「あ、兄さん!!」

「ん？」

不意に後ろから聞き覚えのあるように、どこか違う声が聞こえ振り向いたハヤト

そこにいたのは

「よっすキャラ」

「はい！」

「あの、僕もいるんですけど……」

「野郎に用はねえ」

「はぁ……」

ハヤトに再会して喜んでいる少女と、声をかけたのにスルーされた
め息を吐く少年

『キャラ・ル・ルシエ』と『エリオ・モンディアル』の二人である

「久しぶり……つっても春に会ったっけか」

「そういえばそうですね……」

この二人も『マリアージュ事件』でティアナやハヤトに協力した

そのとき二人は休暇で来ていたのだが、それを返上して二人を手伝
っていたのだ

「ところで、ヴィヴィオ達はどこですか？」

「まだ来てないぞ？」

キヨロキヨロと辺りを見渡すキャラロに答えるハヤト

「え？ でも、お兄ちゃんが居るってことは……時間ギリギリな
んじゃない？」

「どづい意味だコラ」

「兄さん……自分の胸に手を当てて考えてみなよ？」
「……………」

思い当たる節がたくさんあるのだろう

年下相手に頭を下げているハヤトだった……

そこに

「お兄ちゃん!!」

「お？」

「あ」

「来たみたいですよ!!」

元気よくハヤトを呼ぶ声に振り向く三人

そこには、手を振りながら向かってくるヴィヴィオと、その後ろに
なのは、フェイト、コロナの三人がいた

「おまたせ!」

「いえいえ……俺も来たばかりです」

「エリオ、キャロ……久しぶり」

「はい!!」

各自挨拶をするのは達

「とりあえず、一通りのメンバーはそろったね？」

「うん……時間ももうすぐだし……移動しておいっしょ」

「……………」

フェイトに答えるエリオ、キャロ、ヴィヴィオ、コロナの四人

そして、転送ポートへと向かっていく

「向こうに付くのは何時くらいかな？」

「多分・・・お昼くらいかな？」

待っている間、フェイトに時間の確認をするのは

「そういえばヴィヴィオ？ まだどこ行くか聞いてなかったんだけど？」

思い出したコロナがヴィヴィオに聞く

「あ、うん・・・これから行くのは・・・なのはママの故郷の世界なんだ！」

笑顔でコロナに教えるヴィヴィオ

「故郷？」

コロナが首を傾げて聞き返すと

「うん。第97管理外世界・・・現地惑星名称『地球』・・・そこにある『海鳴市』って街なんだけど」

フェイトがコロナに教える

「そこで、夏祭りがあるんだ」

「今回の目的はそれなんだよ?」

エリオとキャラも続ける

「私と、後で合流する子はその生まれ」

「へえ……」

なのはの言葉に頷くコロナ

「あつと……コロナ、一つ注意だ」

「あ、はい」

思い出したハヤトが人差し指を立てながら言う

「向こうじゃ魔法が知られていないから、使つなよ?」

「わかりました!」

頷いて返事をするコロナだが、あることに気づく

「あれ?……魔法が知られてない?」

「そうだよ? 魔法なんて物語の中でしか知られてないから」

「それじゃ……なのはさん達はなんで……?」

コロナの当然の疑問

「あ……昔、ちょっとした事件がきっかけで偶然ね?」

少し濁して答えるなのは

後ろでフェイトも苦笑いしていた

「あ……着いたね？」

なのはが言うと、ポートに到着する

「どこに繋がってるんですか？」

「私の母さんのいるマンションの屋上だよ？」

コロナに答えるフェイト

「それじゃ……」

「レッシンゴー……！」

・ ヴィヴィオの掛け声と共に、海鳴へとワープしたなのは達だった……

第13話 とある少女達の夏休み・出発編（後書き）

どうも！！

という訳で、それぞれ出発です！

ヴィヴィオ達の行き先は海鳴

士郎さんとか桃子さんとか出ちゃいます！！

そして！ 実はこの『夏休み編』では、ラモン先生以外のある作者さんとのコラボをする予定になっています！！

ラモン先生への確認とその作者さんの許可ももちろんいただいています

誰かはそのキャラが登場するまでのお楽しみということ・・・

さて、次回予告です

海鳴に到着したヴィヴィオ達

フェイトの母・リンディに挨拶を済ませ、なのは、ヴィヴィオ、コロナ、ハ

ヤトの四人は一路喫茶『翠屋』へ・・・

「あの・・・なのはさん・・・『翠屋』ってなんですか？」

「私の家族が経営してる喫茶店だよ？」

次回、「とある少女達の夏休み・海鳴到着編」

第14話 とある少女達の夏休み・海鳴到着編（前書き）

大変長らくお待たせしました・・・

今回も原作キャラがでてきますよ～

あとがきでお知らせもあります

第14話 とある少女達の夏休み・海鳴到着編

8月13日・正午・・・

海鳴にある大きなマンションの屋上に眩しい光が放たれ、その中から7人の人物が現れた

「はい！ 到着！！」

「あ・・・」

なのはの言葉に目を開くコロナ

「ここが・・・なのはさんの故郷の世界・・・」

屋上から海鳴の街を眺めてそう呟く

「そうだよ？ ミッドとあんまり変わらないでしょ？」

「はい・・・ちょっと不思議です」

笑顔で聞いてくるなのはにそう答えるコロナ

「それじゃ、母さんに挨拶に行ってくるね？」

「あ、私達も行くよ」

フェイトにそう答えて、一行はハラオウン家の部屋を目指す

「ただいま〜」

「あらフェイト！ それになのはさん達も、おかえりなさい！」
「フェイト〜！」

フェイトが玄関を開け、挨拶をすると中から二人の人物が出てくる
ひとりは、緑色の髪を首で結んだ女性・・・フェイトの義母であり、
時空管理局・総務統括官『リンディ・ハラウン』

そしてもう一人、オレンジ色の髪で獣耳としっぽが特徴のフェイト
の使い魔の『アルフ』の二人である

「母さん、アルフ・・・ただいま！」

フェイトも笑顔で二人に答える

「お久しぶりです！ リンディさん！」

「ええ！ エリオヤキャロも、それにヴィヴィオも・・・大きくな
ったわ〜！」

「・・・えへへ・・・」

リンディが三人を見てそう言うと、三人も照れる

「え〜つと・・・それでそちらが・・・」

「あ、初めまして！ ヴィヴィオの友達で、コロナ・ティミルと言
います！」

「本局執務官のハヤト・ロックウェルっす！」

リンディが初めて見るハヤトとコロナを見ると、二人はそれぞれ自
己紹介をする

「あゝ・・・あなたがハヤト君・・・フェイトやエリオ達から聞いてるわ」

「俺のことを？」

「ええ・・・以前、通信越しに」

家族通信の際に、近況などの話の中でチラッと出てきていたらしい

「母さん、エイミィは？」

この家に住んでいるであろうもう一人・・・元・次元航行艦通信主任で、フェイトの義兄『クロノ・ハラウン』の妻『エイミィ・ハラウン』の姿を探してリンディに聞くフェイト

「あゝ・・・カレルとディエラを連れてお散歩・・・もうすぐ帰ってくると思うけど・・・」

「そうなんだ・・・」

リンディの答えに頷く

「それじゃ・・・私とヴィヴィオ、それにハヤト君とコロナはこのまま『翠屋』に行きますね？」

「なんだ？ もっとゆっくりしていけばいいのに」

時間を確認しながら言うのはに、少し残念そうに答えるアルフ

「お父さん達も待つてるからね・・・ごめんねアルフ？」

「後で、私達も翠屋に行くから」

「うん！ また後でね？」

フェイトに笑顔で答えて翠屋に向かうのは達

「あの・・・なのはさん・・・『翠屋』ってなんですか？」

マンションを出たところで、コロナが質問する

「私の家族が経営してる喫茶店だよ？」

「美味しいケーキとかを扱ってるんだよ」

嬉しそうに教えてくるヴィヴィオ

「なのはさんの家族・・・喫茶店・・・」

意外な情報に驚きを隠せないコロナ

管理局のエースの意外な一面なのだから当然だが・・・

「びつくりだろ？俺も最初聞いたときは驚いたのなんの・・・」

「そういえば・・・教えたときも『嘘だっ！！！！』って言って信じてくれなかったもんね？」

三年前の機動六課での出張任務の時を思い出してそういうなのは

「いやまあ・・・あはは・・・」

思わぬ攻撃に苦笑いのハヤトだった・・・

翠屋に向かう途中、海鳴の街を眺めながら歩いているのは達

「ふえ〜・・・」

さっきからコロナはこの調子である

「上ばっか見てると、コケるぞ〜?」

「う・・・そ、そんなドジじゃありません!!」

ハヤトの失礼な物言いに顔を赤くしながら怒るコロナ

「にやはは・・・コロナ、街を見た感想は?」

「なんていうか・・・ミッドの街とあんまり変わりませんね・・・」

「まあな〜・・・俺も最初見たときはそう思ったな」

「わたしも〜」

コロナの感想に頷いているハヤトとヴィヴィオ

それを聞いたなのはは苦笑い

「あ、ここだよ?」

なのはが指差す方向・・・そこには『翠屋』と書かれた看板があった

「ただいま〜!!」

「お! 帰ってきたな」

「おかえりなさい、なのは! ヴィヴィオちゃんも!」

「はい!!」

なのはが中に声をかけながら入ると、二人が振り返り迎える

一人は『高町士郎』・・・なのはの父親で喫茶『翠屋』のマスター
もう一人は『高町桃子』・・・なのはの母親で『翠屋』のパティシ
エである

(前に会った時と変わってない!?)

二人を見たハヤトの心の第一声がこれ

(いやいや・・・あれから三年経ってんのおかしいだろ!? ま
さか・・・ロストロギア!?)

とんでもなく失礼な推理である

「あら、ハヤト君じゃない! 久しぶり〜」

桃子がハヤトに気づいて声をかける

「あ、どうもっす・・・」

軽く会釈をするハヤト

「それでその子は?」

「あ・・・こ、コロナ・ティミルです!」

ハヤトの後ろのコロナにも気づく桃子に、コロナも自己紹介をする

「お姉ちゃんは?」

「今、奥にいるよ?」

士郎がなのはに答えると、奥からメガネの女性が出てくる

「あ、なのは！ ヴィヴィオ！ おかえり〜！！」

『高町美由紀』・・・なのはの姉で翠屋の店員である

「お姉ちゃん！ ただいま！！」

「お久しぶりで〜す！！」

嬉しそうに答えるなのはとヴィヴィオ

それから、またしてもコロナは自己紹介をしたり、ハヤトが失礼な推理をしたことは言うまでもないだろう

そして、そのまま昼食を摂ろうと席に着き、料理が出来るまで待っているなのは達

「楽しそうな人達ですね？」

「うん！ それに、とっても仲良しなんだよ？」

なのはの家族への感想を言うコロナに答えるヴィヴィオ

ちなみに席は

奥になのは、その横にコロナ、向かい奥にハヤトとその隣にヴィヴィオ

っとなっている

さりげなくを装いハヤトの隣に座ったヴィヴィオだった

「そういえばなのは、こっちにいる間の予定は？」

美由紀が思い出してなのはに聞く

「今日は後でフェイトちゃんとかと一緒にアリサちゃんやすずかちゃんのところ顔を出そうかなって・・・あと『あの人』のところにも」

「でも『彼』・・・忙しいんじゃない？」

「うん・・・だから、少し顔を出すだけになるけど・・・」

美由紀にそう頷き返すなのは

「『あの人』って？」

ヴィヴィオが聞いてくる

「あ、うん・・・明日ある夏祭りを開く神社の神主さん・・・私やフェイトちゃん達の友達だよ？」

「へっ・・・」

なのはのその答えに納得しているコロナ

（高町一尉に男の影が・・・！！）

向かいで聞いていたハヤトはまたしても変な想像をしていた

そこに・・・

「こんにちは」

「うわ〜！ いい匂い！！」

「〜〜ん？」「」「」

四人の良く知った声が聞こえてきた

「あ、いらつしゃ〜い！ 久しぶりだね？」

「はい、美由紀さん」

「あれ？ そっちの子は？」

美由紀は一緒にいる人物の名前を聞こうとすると

「「リオ！？」」

「へ？・・・ヴィヴィオにコロナ！？ なんでここに！？」

「それに綾人君も・・・」

「あ、どうもなのはさん・・・それにハヤトも一緒か」

「どうもっス・・・」

入ってきたのは、別の場所で旅行に行っただと思っていた綾人とリオだった・・・

第14話 とある少女達の夏休み・海鳴到着編（後書き）

どうも！

なんとという在り来りな展開を見せるのか綾人君・・・

あ、書いたの私か・・・

こんなどこにでもあるような展開しか書けない脳が憎らしい・・・

一応、所々で『とあ新』とつながる部分を入れてみました

高町家の時間は、なのはさん以外進んでいないのでは・・・？
なんて考えてしまった・・・

だって『Vivid』でも変わってないじゃないですか！！

さて、最後の方に出てきた『あの人』だの『彼』については・・・
次の次の話ぐらいで出したいと思います・・・

では次回予告！！

思わぬ形で合流した綾人とリオ

二人と共に昼食をとることにしたヴィヴィオ達

そこに、懐かしい顔ぶれが揃う

「あの時」の屈辱・・・忘れてないわよ？」

「ほぐ・・・なら、リベンジします？」

次回、「とある少女達の夏休み・合流編」

タイトルに関しては、もしかしたら変わるかも？

さて・・・以前から行なっていた記念小説『ゆうつつラジオ』に
してですが・・・

お便りが思ったよりも集まらなかったので・・・中止となりました
送っていただいた皆さん・・・申し訳ありませんでした

今後、こんな無謀なことは控えようかと思えます・・・

で、記念小説ですが・・・案は二つあります

1、前回の記念の続編

2、元六課メンバー＋綾人君による陸戦エキシビション

この二つです・・・

どっちやるのかな・・・はたまた記念自体やめところかな・・・

あ、ラジオに関する活動報告と、前回のあとがきは削除しましたの
で

第15話 とある少女達の夏休み・合流編（前書き）

こちらも投稿！

今回の綾人君は少々危ないです・・・

第15話 とある少女達の夏休み・合流編

「でも驚いたな〜・・・まさか綾人君も海鳴出身だったなんて・・・」

「まあ・・・隠すつもりもなかったんですけど・・・タイミングがなくてつい・・・」

なのは達のそばの席に座って、リオと二人で料理を待っている綾人、綾人とリオは、ヴィヴィオ達よりも一日早く海鳴に到着しており、この日はリオに海鳴を案内することにしていて、翠屋も昼食のために綾人のオススメとして立ち寄ったのである

「綾人君も、夏祭りが目的？」

「ええ・・・ほぼ毎年行ってまして・・・手伝いもたまに・・・」

同郷の会話は、思いの外弾んでいた

「でもリオ、なんで断ったの？ 行き先が同じなら大丈夫だったのに・・・」

コロナが綾人の隣のリオに聞くと

「あたしも行き先聞いたのは、出発の日だったし・・・ヴィヴィオだって行き先教えてくれなかったじゃん」

「それは・・・びっくりさせたかったから・・・」

ヴィヴィオが少し俯く

「あゝ・・・別に責めてるわけじゃなくてね？ それに、断ったのはあたしの意思だしね・・・」

「ま、なにせよ会えたんだし、結果オーライってやつだな？」

リオの頭を撫でながら綾人が締める

「それにしても、ハヤト・・・お前もいた事にはさすがに驚いたけど？」

「まあ、特に断る理由もなかったんで・・・」

コーヒーを飲みながら綾人に答えるハヤト

「ヴィヴィオちゃんが誘ったのか？」

「はい！」

「そっか・・・（これは・・・チャンスか？）」

ヴィヴィオに答えながらそう考える綾人

（今度の夏祭りで、うまく運べば告白に持ち込めるかもな・・・）

何気に考えることははやてと変わらない綾人

「お待ちどろ〜！！」

そこに、料理を運んできた美由紀と桃子

「それじゃ、いただきます」

「」「」「いただきます！！」「」「」

綾人の合図で、一緒に食べ始める子供三人

持ってくるタイミングをうまく合わせていた翠屋スタッフ

「ところで、綾人君？ このあとの予定ってどうなってるの？」

不意に気になったことを聞いてみるなのは

「そうですね・・・このままりオの案内を続けますけど・・・」

「それなら、一緒に行きませんか？」

「一緒に？」

ヴィヴィオの提案に首を傾げる綾人とリオ

「うん。私達もコロナを案内したいしね？ どうかね？」

「どうする？ リオ？」

「あたしは賛成です！」

綾人の質問に笑顔で即答するリオ

なんだかんだと言っても、友達と一緒に行動するのが嬉しい様子だ

そこに

「こんにちは〜！」

「あ！ フェイトちゃん！」

「フェイトママ〜！」

フェイトとエリオ、キャロの三人も到着した

「やつほ〜！　なのは〜」
「なのはちゃん！」

後ろには、ブラウンのショートカットの女性と、青いロングヘアの女性がいた

「アリサちゃんにすずかちゃん！！」

なのはも驚きながら近づく

二人は、なのはやフェイトと小学生時代からの親友の『アリサ・バニングス』と『月村すずか』

「ひっさしぶり〜！」

「元気そうだね？」

「うん！」

親友との再会に、なのはも笑顔になる

「お久しぶりで〜す！」

「ヴィヴィオちゃん！」

「あんたも元気そうね〜？」

ヴィヴィオも、二人に挨拶する

「で……そっちの二人は？」

「あ……わたしの友達です！」

「リオ・ウエズリーです！」

「コロナ・ティミルです」

リオとコロナも自己紹介

「どうもっス」

「あゝ・・・あんたもいたの・・・」

「何か問題が？」

ハヤトを見つけたアリサの顔が少し険しくなる

「“あの時”の屈辱・・・忘れてないわよ？」

「ほゝ・・・なら・・・リベンジします？」

なぜか火花を散らし出すアリサとハヤト

フェイトやなのはも慌て出す

「あ、アリサ・・・落ち着いて？ね？」

「そうだよ・・・ほら、ここお店だし・・・」

「なら外で」

「受けて立ちましょう・・・」

すっと立ち上がるハヤトを連れて出ていこうとするアリサ

「ちよっ！？　アリサちゃん！？　ハヤト君！？」

必死で二人を止めようとするのはとフェイト

「放しなさいよ！　二人とも！！　こいつにギャフンと言わせてみせるから！！」

「ダメだっばアリサちゃん！！」

羽交い締めにしてアリサを抑えるのはとフェイト

「放せチビ子ども!! 俺には芸人としての使命が!!」

「お兄ちゃんは管理局員だよ!？」

「しかも執務官でしょ!？」

向かいではエリオとキャロ、それにヴィヴィオとコロナがハヤトを抑えていた

「あ・・・綾人君も手伝・・・」

「久しぶりだね? 綾人君」

「ええ。すずかさんもお元気そうで」

「師匠。お知り合いですか?」

そんな様子を気に止めることなく挨拶をしている綾人とすずか

「ちょ・・・綾人君!!」

「はい?・・・なにか?」

とつてもいい笑顔で答える綾人

「賑やかですね・・・ご家族ですか?」

「面白いお兄さんですね」

「何言ってるの二人とも!？」

ハヤトとアリサのやりとりを見て、瞬時にアイコンタクトで知らないふりを貫く構えを実行に移した師匠と弟子

「うん・・・綾人君。お願いできるかな?」

「やれやれ・・・しょうがないですね・・・」

すずかの一言に、ため息混じりに立ち上がる綾人

そして、ハヤトの後ろに立ち首元に顔を近づけ・・・

「ふう・・・」

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:~!？」

背筋に凄まじい悪寒が走り、へたり込むハヤト

綾人はハヤトの首に息を小さく吹きかけたのだ

女性にならやられても別に構わないが、男にやられたとなると屈辱
以外なものでもなかった・・・

「さて・・・」

「あ・・・」

綾人はゆっくりと視線をアリサに移す

アリサも突然の事に驚いたが、綾人の視線に気づき慌て出すが、な
のはとフェイト二人に抑えられ動けない

「な、なのは!? フェイト!?」

「アリサちゃん・・・」

「少し・・・頭冷やそう・・・? ね?」

「ちょ・・・ちよつと待って! ほら! もう落ち着いたから・・・
だから・・・ね?」

「大丈夫です・・・痛くないですから・・・」

笑顔でそうアリサに答える綾人

「待ちなさいって!! ねえってば!!」

「ダメだよ? アリサちゃん・・・」

「すずかまで!?!」

今度はすずかが正面からアリサの肩をつかむ

その間に、綾人はすつと後ろに回り込み、首元に顔を近づけ

「ふっ・・・」

「ひいう!?!」

妙な感覚に襲われ、力が抜けるアリサ

「ふむ・・・やっぱり、女性の方がやりがいありますね・・・」

真顔で頷いている綾人

その後ろでリオは・・・

(ちよっと・・・やられてみたいかも・・・)

顔を赤らめながらそんなことを思っていた・・・

さらにヴィヴィオは・・・

(お、お兄ちゃんは・・・ヴィヴィがああいうことしたら喜んでくれるかな? でも、ヴィヴィオの背じゃ届かないし・・・でも、大人モードならなんとか届くかな・・・でもでも、どうせならお兄ち

やんにやってもらいたいし・・・あ、それならいつそのこと耳元で
愛とか囁いてもらったりとかして・・・キヤー!!!(

妄想が大暴走していた・・・

第15話 とある少女達の夏休み・合流編（後書き）

どうも！！

アリスさんとすずかさんが合流しました

綾人君とすずかさんの関係は「信念」を読んでいただけたらわかるかと思えます

アリスさんとは、すずかさんと再会した際に紹介されているという状態ですね

忘れた頃にやってきた「暴走ヴィヴィオ」・・・今回はリオも未遂ですね

アリスさんとハヤト君は、完全に私の妄想です・・・気に入らなければおっしゃって下さい・・・編集しますので・・・

では次回予告！！

綾人達と一緒に海鳴を回ることにしたヴィヴィオ

コロナとリオの二人も海鳴を満喫し、最後になのはと綾人はとある場所へ案内する・・・

「ここは？」

「明日の夏祭りの会場だな・・・」

次回、「とある少女達の夏休み・海鳴観光編」

今回は、コラボしたキャラが登場しますよー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3646s/>

魔法少女リリカルなのは ~高町ヴィヴィオの憂鬱~

2011年12月8日04時04分発行